霊ず・でっど

マカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊ず・でっど

【Ｎコード】
Ｎ２０１３Ａ

【作者名】
マカ

【あらすじ】
事故に遭い死んで幽霊となった七瀬伊織。幼馴染みの秋山紅葉危機を知り八ノ瀬律として現世へと戻る。

始まり（前書き）

目を通して頂ければ幸いです。

始まり

今にも泣き出しそうな鉛色の雲が空をうめつくす。
そんな中、誰にも見つからないように黒い外套を着た男は先にいる二人を見つめる。
二人の内一人の少女には愛しい者を愛でるように、しかしその眼には悲しみが写るのみ。
少女はもう自分の事など覚えていないのだろう。
その証拠に少女の笑顔がそこにある。自分が居なくなった時はずっと泣いていた・・・でもこれは良い事なんだ。
男は偽りの思いで自分を埋め尽くす。
何故なら、男が残った理由はこの笑顔のためなのだ。自身がいなくなった瞬間少女の身の危険が理解できた。だから、少女を護っていこうと残ったのだ。
しかし、少女の隣にいる少年の御蔭で自分がいる必要は無くなるのだ。
自分が傷つき、血を吐きながらも少女を護ってきた。だが、それも気付かれる事もないまま終わるのだ。
少女は少年に笑顔を向ける。
その瞬間、少女への憎悪が弾けた。
何故、自分が消える。少女の為にやってきたのに少女は気付かない。
ならば、気付かせればいい、自分と同じ状況にすれば気付くはずだ。
しかし、自分は少女に近づけない、少女の隣にいる少年の所為で・・・なら、先に少年を殺せばいい・・・かつての私と同じように。

男は気付かない、自分の口の端がどれだけ歪んでいるのかを。
その時からだった。雨が降り始めたのは。

始まり

朝日がシンと冷えた空気に差し込む。そんな中めざまし時計が鳴り響く。
「う〜」
ベッドから伸びた手が何度か中空を払いその電子音を止める。
「よし」
身体をおこすことなく布団に潜り込む。が。
「起きてください、伊織」
ドアを開けて入ってきた少女が呼びかける。
腰のあたりまでさらりとのばした黒い髪、眼鏡の奥には少し垂れた目、おっとりとした雰囲気をもつ少女、名前は秋山紅葉。
「う〜」　布団に埋まっている伊織と呼ばれた少年はうめいて布団から出てこない。
「起きてください」
身体を揺らすが、起きる気配はない。
「伊織」
三度目の呼びかけにも応えない。
　はぁと息を漏らし、右手に白く四角い容器を取り出し、左手で容器の口を覆いひっくり返すとポタポタと水の滴る音がした。
「伊織」
最後通牒をかけるも反応は無い。紅葉は仕方ないと頭を左右に振り容器の中身を左手に乗せると手のひらの水が床に滴る。
右手で掛け布団を少しめくり上げ顔だけを出す。
「だから…」
伊織が布団を元に戻そうとした瞬間。

べちゃりという何かがひっつき崩れた音。
伊織の顔で豆腐が潰れた。
「つ、冷たっ！」
顔に潰れた豆腐をつけて跳ね上がる。
「起きましたか」
「そらもうばっちりと」
くすくすと笑う紅葉を豆腐が顔につけたまま睨みつけながらベッドからおりる七瀬伊織。
「はい、タオルです」
紅葉の差し出した青いタオルを受け取り顔を拭く。
「ありがと」
「いえいえ、どういたしまして」
紅葉は行儀よく頭を下げる。
「でも……」
伊織の言葉に首を傾げる。
「もう少し優しく起こしてくれ」
少し考えると紅葉は笑顔で応えた。
「…分かりました。次は絹にしておきます」
「いや」
伊織が何か言うより早く紅葉は朝御飯出来てますからと言い残して部屋を出ていった。
「…結局、豆腐で起こされるのか」
諦めきったため息をつき拭き終わったタオルを机に置いて制服に着替える。
制服に着替え、一階に下りてさっきのタオルを洗濯物かごに入れて顔を洗い居間に入る。
「おはようございます、亜希子さん」
「おはようございます。伊織さん」
俺が挨拶をした相手は紅葉の母親の秋山亜希子さんは長身であるが紅葉と似た雰囲気を持っている。

紅葉の喋り方は亜希子さんに似たんだなぁ。
「朝御飯、召し上がりますか？」
「あ、はい、戴きます」
「わかりました。少し待ってください」
「はい」
亜希子さんが台所に戻ると俺は椅子に座りテレビをつけた。
天気予報を伝えるキャスターの指す所には晴れマークと雨マークがあった。
「夕方から雨か」
「あら、本当ですか」
亜希子さんは俺の前に御飯に納豆、味噌汁、主菜に焼き鮭を置いてくれる。
「あ、ありがとうございます。祐子さん」
「いえ、それより雨って」
「ええ、でも俺たちが帰ってくる頃だと思いますけど」
「いえ、今日紅葉が部活で遅くなると言っていたので」
「紅葉は朝練ですか」
「ええ」
亜希子さんは頬に手をあてて困ったような顔をする。
「大丈夫ですよ、俺が持ってきますから」
「お願いできますか」
「はい」
とりあえず朝食を始めた。

「ごちそうさまでした」
「お粗末さまです」
食器を流しにつけて自分の部屋に戻り鞄を持って部屋を出る。
「伊織さん」
振り向くと亜希子さんが弁当箱を持っていた。

「あ、ありがとうございます」
弁当箱を受け取り鞄に詰める。
「それじゃあ、行ってきます」
「気をつけて、行ってらっしゃい」

「寒いな、冬は」
ふと、道を挟んだ向かいに空地が目に入った。
俺がここに来た時から空地なんだよなぁ。
まだ、持ち主決まんないのか。
少し思い出に耽っていると俺と同じ学生服を着た何人かが足早に過ぎ去っていく。
「？」
時計を確認すると八時半を指していた。
「やばい」
うちの学校、京葉高校は八時四十分までに教室にいなければ遅刻になってしまうのだ。
ここから学校まで走って十分はかかる。
ぎりぎりもいいところだ。
文句を言ってる場合じゃないし少し急ぐか。

急いだ。かなり急いだ。が、例えどんなに頑張ったとは言え出来ない事は出来ない物である。そう
これは俺のせいじゃない。きっと。
ドアを開ける手に力がこもる。
勇気をもってドアを開ける。
「すいません、遅れましたー！」
ゴス！
２－１と書かれた出席簿が額に命中した。

「この私のＨＲに遅れるとはいい度胸だ。ああん、七瀬」
白衣を来た化学の女教師白河　莢先生は俺の胸倉を掴む。
「わ、訳を聞いてください」
俺の言葉を莢先生は眉間にしわをよせる。
「訳？言ってみろ」
「はい、実は困っているお婆さんが・・・」
「はい、嘘。因みにその言い訳は四月二十五日に使っているぞ。まぁ当然、嘘だとわかったがな」
くっ。負けないぞ。
「違いますよ」
「違う？」
「そう、その困っているお婆さんが光の三原色と他の二色の全身タイツを着た五人組に囲まれていたんですよ」
「ほほう、で？」
莢先生の目は冷やかで他の生徒の視線も痛く感じられたが俺は負けない。
「その困ったおばあさんが突如巨大化して五人組を襲うんです。が、その五人組が叫ぶと五体のロボットが出てきたら合体して驚きました」
『・・・』
莢先生とクラスの皆はあきれ返って声も出せないようだ。
ふっ、だが、俺はやめない。
「巨大ロボットと巨大お婆さんが戦いだして学校へ行くことが出来なかったんです」
「つまり？」
莢先生はジト目でこちらを見つめる。
「俺のせいじゃない」
「そうか」
莢先生は諦めの混じったため息を吐く。
「毎回、毎回よく舌が回るものだな」

ＨＲ終了を告げるチャイムが鳴った。
莢先生は落ちた出席簿を拾うと。
「じゃあ、ＨＲは終わりだ。勉強しろよ」
ほっ助かっ……た？
何故か俺の意思なく体が後ろへ進む。
後ろを見ると莢先生が俺の襟を掴み引張っていた。
「な、何するんですか」
「七瀬は私と来るんだ」
「でも俺はこれから授業が」
「私の授業じゃないからいいんだ」
「うわぁ」
言い切ったよ。この人。
ああ、敵わないと改めて確信した今日この頃。

日常

「何ですか、いきなりこんな所に連れて」
色々な薬品が棚に置かれ、また別の棚にはビーカーなどが並んでいる化学準備室。
あまり広い所ではない。そんな所に二人きり。
はっ！まさか。
「俺の体が目当て！？」
「な訳あるか」
ガキィ！
茨先生の拳が俺の頬を撃墜する。
「うう、陥没したらどうするんですか」
「ふん、そこまでやわに出来てないだろう」
しどい。
「冗談は置いといて」
「かなり痛いんですが」
「で、最近どうだ」
熱くなった頬をさする俺を無視して話を進める。
「どうって？」
「いや、何か異常はないか」
「異常？何もないと思いますけど」
「じゃあ、秋山は？」
「紅葉…ですか？何もないと思いますけど」
「……そうか」
茨先生は安心したような、何か不安があるような息を吐く。
「どうしたんですか、俺と紅葉が何か…？」
俺はともかく紅葉に何かあるとは思えないし。
「いや、何でもない。じゃあ、次の授業の準備頼むぞ」
「え？」

「何を驚いているんだ？元々このためにお前を呼んだんだぞ」
「俺一人でですか」
「七瀬以外に誰がいる」
茨先生はあたりを見回すフリをして肩をすくめた。
「鬼」
「まぁ、そういうな今朝の遅刻を無しにしてやるから」
魅力的な言葉だ。が。
「その代わり数学が欠課になりましたけどね」
「気にするな」
気にするって。
「数学の谷先生が言っていたが、数学の授業中の居眠りが多いらしいじゃないか」
「うっ」
そ、それは。
「私はお前の担任だから、よくその事で小言を言われるんだ」
「うっ」
「これくらいやれ。罪滅ぼしに」
「わ、わかりました」
茨先生は満足げに頷くと俺にいくつか指示をだして化学準備室から出ていった。
「はぁ」
まぁ、仕方がない、身から出た錆って奴か。

最初の授業が終わり、次の授業までの休み時間は少し騒がしくなる。
無論俺のクラスも例外ではない。ので、俺が入った事に気付かない。
「お、七瀬、お帰り」
事はなかった。

「ただいま」
机につくと、同じクラスの岩田と長谷川が少しにやついた顔で寄ってきた。
「七瀬さぁ、朝の言い訳は無いだろう」
「そうそう」
「そうか？かなり良い出来だったと思うけど」
「どこがだよ」
岩田の突っ込みで笑いが弾けた。
そんな馬鹿話をしていたら次の授業の先生が入ってきたので中断して二人は席に戻った。
これからやる授業は古典だが莢先生の授業の準備をしたおかげで俺は疲れているので寝るとしよう。
「ぐぅ」

気付くと帰りのＨＲをうけていた。
もうこんな時間か早いな。
ぼーっと窓の外を見つめると夕焼け空が黒い雲に覆われかけている。
はて？何か忘れているような。
「雨が降りそうだね」
近くのクラスの女子、確か沢田さんと太田さんが莢先生にばれないように小さな声で話している。
雨？
「そうだね、でも私今日部活無いから、間に合いそうだよ」
「え～、いいなぁ。今日傘忘れちゃったんだよ」
傘？あれ？
今朝の会話が甦ってくる。

「夕方から雨か」
「あら、本当ですか」
亜希子さんは俺の前に御飯に納豆、味噌汁、主菜に焼き鮭を置いてくれる。
「あ、ありがとうございます。祐子さん」
「いえ、それより雨って」
「ええ、でも俺たちが帰ってきた後くらいだと思いますけど」
「いえ、今日紅葉が部活で遅くなると言っていたので」
「紅葉は朝練ですか」
「ええ」
亜希子さんは頬に手をあてて困ったような顔をする。
「大丈夫ですよ、俺が持ってきますから」
「お願いできますか」
「はい」

「し、しまった〜」
ガスッ！
本日二度目の出席簿激突。
「うるさいぞ、七瀬」
クラスに笑い声が広まる。
「あ、すいません」
「まったく、あ〜、静かに」
茨先生が制すと笑い声は小さくなり、それ以上何も言わずに明日の連絡事項の続きを話す。
はいって言っちゃてるよ、というか言ったよ俺。
でも、傘を持ってくるのは忘れたよ俺。
自分のアホさ加減にため息が出る。
「これで終了だ。寄り道して帰らないように」
ＨＲが終わった。

よし、じゃあ。
「七瀬待て」
走ろうとしていたところを莢先生の一言で制止させられた。
「何ですか」
下を見ろと合図が送られる。
下？言うとおりに下を向くと出席簿があった。
さっきのやつか。投げなきゃいいのに。
持ってこいと手招きをしてくるので仕方なく持っていった。
「はい」
「ありがとな」
「いえ」
「あまり奇声をあげるなよ」
うっ。
「気をつけます」
「じゃ、気をつけて帰れよ」
「ういっす」
教室を出て隣のクラスを覗くと。
よかった。まだいた。
近くにいた男子生徒を呼んで。
「あの、も…、いや秋山さん読んでもらっていいかな」
男子生徒は快く引き受けてくれた。
「秋山さんにお客さん」
紅葉は俺に気付くと声を掛けてくれた男子に礼を言うとこちらに来る。
「何ですか？伊織」
「うん、これから雨が降りそうなんで傘を持って来ようと思うんだが何処に置いておけば良いかなと思って」
「今朝、持ってきてくれたんじゃなかったんですか？」
「うっ」

な、何故知っている。
紅葉は俺の思ってる事を読み取ったのか携帯を取り出した。
「お母さんが教えてくれたんですよ、今日、夕方以降から雨が降るから伊織が傘を持ってきてくれるって」
亜希子さ～ん。
「ま、それは置いといてだ。何処に持ってくればいい？」
「そうですね」
紅葉は少し悩むと。
「じゃあ、今日部活が終わったら来てください」
「迎えに来いと」
「はい」
「別に何処かに置いておけば…」
「迎えに来てください」
紅葉は鬼気迫る顔で近づいてくる。
「わ、わかったよ。何時くらいに来ればいい？」
えへへと紅葉は顔を綻ばす。
「6時くらいで」
「わかった。じゃあ、後で」
「はい」
とりあえず学校を後にした。

日常から……

「そろそろ行くかな」
テレビの上にある時計が五時半を指した事を確認して居間を出る。
「伊織さんお願いしますね」
「あ、はい」
今朝と同じような状況だが朝とは少し違いマフラーを装備して傘を二本持って亜希子さんに見送られドアを開ける。
「まだ降ってないな」
空を見上げると、もう鉛色の雲しか見当たらない。
帰ってくるときも降ってなきゃ良いけどな。
そんな事を思いつつ学校に向かう。

「うふふ」
「ちょっと、紅葉」
つつかれた方へ振り向くと弓道部主将の真中綾子がいました。
「何ですか？綾子」
つついた理由を聞くと何か困ったような反応をする。
綾子は周りから男勝りといわれています。が、かなりの美人だからなのか困った顔をしていても艶やかさを少しも損なわない。羨ましい限りです。
「その、さっきからにやけてて私や後輩達も気味悪がってるんだけど。何か良い事あった？」
「えっ？」
『わかった。じゃあ、後で』
さっきの会話が頭に浮かぶと、顔が緩むのがわかってしまいます。
「な、何でもないですよ」

恥ずかしいので顔をなんとか引き締めて綾子に向き直る。
「そうかな～」
「そうですよ。あ、もう終わりじゃないですか？」
弓道場の時計は５時５０分を指していた。
「あ、本当だ。」
綾子は部員全員に部活の終了を告げた。

丁度６時か。
時間はそれなりに余裕があると思って、ゆっくりしてたら六時ぎりぎりに学校に着いてしまった。
弓道場のほうだよな。弓道場は学校の裏側にある。
ここは正門だからそれなりに距離があるので少し歩く速度を速める。
学校の中庭あたりまで行くと人影が一つ。
この時間に部活やってるところも多いけどその人影は見知った顔だった。
「あれ、七瀬？」
去年、俺と同じクラスの真中綾子だった。
「よう、真中。何してんだ」
「弓道場の鍵を返しにね」
そう言って鍵を見せる。
ああ、そういえばこいつ弓道部部長だっけ。
「それよりあんたこそ、こんなところで何してるんだ？」
「俺？俺はこれを紅葉に届けにきたんだよ」
そういって傘を見せる。
「ああ、なるほど」
真中は何か納得したように呟いた。
「なんだ？」
「いや、何でもないよ。んじゃ」

「ああ」
そういって真中は南棟へ歩いていった。
伊織が弓道場へ向かう背中を見て。
「あたしも彼氏がほしいねぇ」
綾子のそんな呟きは誰に聞かれることなく風にながされていく。

「伊織」
弓道場の前に紅葉は立っていた。
「三分遅れですよ」
時計を確認すると6時を3分過ぎたところだった。
「大目に見てくれよ」
「ふふ、仕方ないですね」
紅葉は嬉しそうに笑う。
何か、あったのか？
「何か良いことあったのか？」
「えっ……と、ありましたよ」
少し考えてそう答えた。
「そうか、それはよかった」
「……はい」
何か、残念そうなため息を吐いて項垂れる。
忙しいなぁ。
「とりあえず、帰るか」
「はい」
俺たちは学校を後にした。

「なぁ、紅葉」
「なんですか？」

紅葉はさっきから笑顔を絶やすことなく歩いている。
「良い事あった。って言ってたけど何があったんだ？」
物凄く気になるのだが。
「う～ん」
悩むような仕草をとる。
そういう仕草は可愛いく思う。
「？」
「私は……ですね」
何か覚悟したような気配が。
「うん」
「伊織と一緒に帰れるのが嬉しかったんです」
「は？」
予想外な言葉というか、意味が解らない。
「解らないんですか？」
「だって、たまにこうして帰ってるし」
俺の言葉にため息を吐く。
「何か、悪いこと言ったか？」
「いえ」
なんだか重苦しい空気が流れる。
何か無神経な事を言ってしまったのだろうか。
ここは。
「ごめん」
「え？」
紅葉は俺の行動に驚く。
「な、なんで伊織が謝るんですか？」
「なんでって、俺が紅葉にアホな事を言ったんじゃ」
「……」
紅葉は顔を俯かせてしまった。
「も、紅葉？」
肩を震わせている。顔を覗くが影で見えない。

「だ、大丈夫か？」
「ふ……」
「ふ？」
「ふふふふふ」
「え」
「あはははははは」
紅葉は珍しく大声で笑い出した。
「も、紅葉さん？」
「伊織らしいです」
「俺らしい？」
楽しそうにそう言った。
よくわからなんのだが。
俺が悩んでいると頭に冷たい何かが当たった。
「ん？」
「雨ですね。伊織、傘を下さい」
「あいよ」
傘を手渡し俺も傘を開いた。
雨が降ると余計に寒くなる。
「まだ家まで結構あるのになぁ」
「そうですね」
学校から家までの距離の三分の一までしかきてない。
しかも、いまは信号待ちだ。
くしゅんと紅葉のくしゃみが聞こえた。
「ほれ」
「あっ」
紅葉の首に俺がしていたマフラーを巻いてやった。
「風邪引くぞ」
「ありがとうございます。でも」
くすりと笑う。
「不器用な巻き方ですねぇ」

「う、うるさいなぁ人に巻くの初めてだから仕方ないだろう」
紅葉の言うとおり自分で見てもお世辞にも綺麗とは言えない巻き方だ。
「自分で直せば良いだろう」
「いえ、これでいいです」
そう言って、傘を差しながら信号が変わるのを待つ。
会話が無いのも寂しいので気になった事を聞いてみた。
「さっきのは何だったんだ？」
「さっき……ですか」
紅葉は恥ずかしそう俯いた。
「そ、その」
「その？」
と、信号が青に変わった。
「あ、信号かわりましたよ」
紅葉はそう言うと横断歩道を俺を置いて渡りだした。
ま、いっか……！？
車線の信号は赤くなっているのに気付いていないのか車はかなりの速度で走ってくる。
止まるようにはみえない。
「紅葉！」
「はい？」
紅葉は気付いていない。
間に合わない。
無意識に足が前へ出る。それを止めず加速する。
「紅葉ぃぃぃ！」

――――護るから――――

≪続く≫

非日常へ

公園で女の子が泣いている。
「どうしたの？」
一人の少年は少女に声をかけた。
「うっ・・・うっだぁれ？」
少女は顔をあげた。
「俺は、伊織」
少年は少女に笑顔で応えた。
「きみは？」
「わ、私は紅葉」
ああ、これは俺が初めて紅葉と会った時のことだ。
「紅葉はどうして泣いてるの？」
「お父さんが・・・」
少女はまた俯いてしまった。
これは俺が初めて紅葉と会った日だ。
「どうしたの？」
少年は少女に問う。
少女は怯えたように一歩下がる。
少年は少女を安心させるように笑った。
その笑顔を見た少女は安心したようにゆっくりと話し始めた。
「あ、あのねお父さんが・・・」
少女の父親が道路で車に轢かれそうになった自分をかばい事故で亡くなったと嗚咽まじりで説明する。
少年は困った。
当然だこのときの俺は肉親が死んでいなかった。だから死という物が理解できなかった。
けど、少女に泣き止んで欲しかった。

だから口を開いた。
『俺が君を護るだから泣かないで』
少女の戸惑いは笑顔に変わった。

ああ、そうだ俺はこの時から紅葉を護ろうって決めたんだ。
だから、自然と脚が出てくれた。
「……ろ」
紅葉を護ることが出来た。
「……きろ」
悔いは無い。
「起きろ！七瀬伊織」
「は、はい」
耳元で出された大声はかなり痛かったが何故か懐かしく感じられた。
この声は、確か。
「莢先生」
そこには見慣れた白衣を着た白河　莢先生がいた。
「お久しぶりです」
「うむ、今はまだ寝てろ。まだ、不安定のようだ」
「はぁ？」
莢先生はよく解らない事を言う。とりあえず言う通りにした。
「あれ？」
自分の言った事に違和感を覚える。
何で俺は久しぶりなんて思ったんだろう？
「で、どうだ」
「どうだって何がですか」
「二週間ぶりに起きたんだ体に何か以上はないか？」
心配するように俺の顔を覗き込んでくる。
「二週刊！？」
いや、字が違う二週間だ。なんでそんなに寝てるんだ？俺は。

「七瀬、お前はあの時の事故以来ずっと寝ていたんだ」
あの時？事故？……ああ、そうだ。
車にはねられたんだ。でも、目の前には俺の担任である茨先生がいる。
なら、俺は生きているんだ。多分、事故に遭った俺はそれで二週間も寝込んでいたんだろう。そんなことより……。
紅葉の顔がよぎる。
あの時、俺があんな目に遭った理由は紅葉を助けるためだ。俺が生きていて紅葉がいないなんて事は許されない。
「紅葉、紅葉は無事なんですか？」
茨先生につかみ掛かりそうになった俺をなだめるように肩をおさえる。
「落ち着け……秋山は無事だよ」
「本当ですか」
「ああ、秋山の体には異常は無い。七瀬のおかげでな」
「？」
俺の考えている事を読み取ったのかそんな事を言う。でもその中に茨先生の言葉には微妙なニュアンスが含まれている気がした。
でも、紅葉は無事なんだ。
俺はホッと安堵の息をついた。
「紅葉は今、何処にいるんですか？」
「……秋山は恐らく自宅にいるよ」
とても言いにくい事なのか歯切れが悪い。
「紅葉に何かあったんですか？」
「いや……そのだな」
どんどん歯切れが悪くなっていく。
「何か、あったんですね」

言うが早く俺は立ち上がり秋山の家に向かい走り出した。
「待て、七瀬」
茨先生の声を聞かずに……。
「がっ」
がつんと見えない何かにぶつかって仰向けに倒れた。視界に入るのは冬だというのにこの上なく晴れわたった青い空。
空？
「はぁ、人の話は聞け七瀬」
頭を抑え、こちらに来る茨先生。
「何故に俺は外にいるんですか？」
外にいるのに寒くない、二週間寝ていたから今は十二月だ、なのに身体は何も感じていない。
「気付かなかったのか」
「はぁ、入院してるのかとばかり思ってました」
はぁと言いをつく茨先生。
「何で俺は外にいるんですか？この見えない壁は何ですか？」
「解った。全部教える。が、覚悟して欲しい」
茨先生の言っている事はよく解らないが、目は真剣そのものだ。
「どういうことですか？」
「解りやすく言うと驚くな」
「はぁ」
とりあえず先が知りたいので頷いた。
「結論から言おう」
茨先生の目はとても辛そうに見えた。
「七瀬伊織は死んだ。だから、お前は事故があったここにいる」
そういって、地面を指した。
「は？」
俺が死んだ？
「そんな……」

たちの悪い冗談だと笑い飛ばしたかった。なのに莢先生の言うとおりここはあの時の道路の真ん中
だ。
「どうして？」
「原因はお前もわかるだろう？」
莢先生の声は言い聞かすように優しかった。
確かに車にはねられる記憶は曖昧だが憶えている。
「じゃあ、今の俺は……！？」
起きてから初めて自分の身体を見ると僅かに透けてみえた。
「今の状態は魂のみがさらけでている、解りやすく言えば幽霊だ」
自分の身体と莢先生の言葉が否定する事を許さない。
無意識のうちにはぁ、と息をついていた。
「紅葉は無事なんですよね？」
莢先生はああ、と頷いてくれた。
よかった。約束が守れた。なら……。
「なんとか理解できました」
後悔する事なんか無い。
「なっ！」
かなり驚いている莢先生。
「本当か？」
こくんと頷いてみせる。
自分でも不思議なくらい落ちつけた。
「もう、否定はできませんよ」
自分の透けている身体を指す。
「そうか」
なら、と続け指を弾く。すると何かを呟くと竹箒を莢先生は握っていた。
「はっ？」
「お前を霊界に連れて行く」
今更気付いたのだがこの人は一体何者？

「ほれ」
渡された長方形の手のひらサイズの紙が一枚。そこには。
閻魔堂所属霊界案内人
白河　莢
と、書かれていた。電話番号も書いてあったが繋がるのだろうか？
「れ、霊界案内人！？」
「そのとおり、私はお前のような魂を霊界に導く仕事をやっている。ありていに言えば死神だな」
し、死神？何故にそんなお人が学校の教師を？
「まぁ、知りたい事は色々あるだろうがそれは追々説明しよう」
「えっ？」
莢先生は俺の襟首を引張ると箒に腰を掛け飛んだ。
≪続く≫

日常のような非日常

「ふ～、やっと着いた……のか？」
莢先生に引っ張られる事２時間。
幽霊になっても浮く事は出来ないらしく俺は地に足をついて歩いていた。
莢先生、曰く幽霊になっても生前と同じ事しかできないらしい。
「ああ、そうだ。ここが、霊界だ」
霊界と呼ばれる場所は薄暗くて広い。何かがあるようには見えなかった。
莢先生は何かを呟いて竹箒をどこかに消した。
さっきから気になってたんだけど。
「その箒はどこにいくんですか？」
「ああ、霊界ロッカーだ」
「霊界ロッカー？」
「学校にある清掃ロッカーとかたちは似ているな。箒は常にその霊界ロッカーと繋がっているんだ。
私たち、霊界案内人はロッカーのＩＤを照らし合わせる事で呼んだり消したり出来る。それ以上詳しい事は知らん。」
「ＩＤはどうやって照らし合わせているんですか？」
見たところ莢先生は何かを持っているようにみえない。
「ＩＤナンバーを言えばいいんだ」
少し待てと莢先生は口を開く。
「ＡＣ－１７７６－７－４」
アメリカ独立宣言！？
突如、箒は現れた。
「こんなとこだ」
「は、はぁ」

莢先生が箒を出したことよりＩＤナンバーが気になる。
紀元後１７７６年７月４日と言えばアメリカ独立宣言をした年なのだが、何か狙いがあるんだろうか？
「何をぼけっとしている。行くぞ七瀬」
莢先生は箒を消して前を歩く。
「は、はい」

「な、何故に」
「どうしたんだ？七瀬」
あれから、五分ほど歩くと閻魔堂と書かれたところに入ると、中には明かりが点いていて中の様子がよくわかった。
そこには俺がいた世界にあるであろう光景だった。
「頭に角を2本くらい生やしたりして身体が素で赤かったり、青かったりしてる方達がスーツ着てデスクワークしてるんですか？」
一般的に鬼と呼ばれる方達が死んだような顔をしながらも机にあるパソコンに向かってせわしなく指を動かしている。
「ああ、彼等、鬼といわれる者たちは基本的に事務を行っている。例えば未来の死亡リストとか死んだ者の素行調査とかな」
「そこうちょうさ？」
何故にそんな事を。
「ん？この話はお前達も知っていると思ったが」
「？」
「閻魔帳を知っているか？」
「はぁ」

「何が書かれているか解るか？」
「そりゃ、死んだ人の行いとかですか」
確か閻魔って鬼が死んだ者の魂を天国と地獄、どちらかにいかせるかどうか区別するために閻魔帳
に書かれているその魂の行いで判断するって聞いた事がある。
「正解だ。ではどうやって閻魔帳に死んだ者の行いを書いていると思う？」
「あ」
なるほど、それ故に素行調査か。
「そういう事だ」
ということは閻魔って職業名なのかな？素行調査しているのは鬼なわけで裁判官みたいなものか。
「着いたぞ」
ぼ～っと歩いていると莢先生はでかい扉の前で止まった。
扉には表札のような物が掛けてあり閻魔堂本堂と書かれていた。
「はっ！？」
急速に今の自分の状況を思い出す。
そういえば、俺死んでるんだよな。
莢先生がいたおかげでそれを忘れかけていた。
閻魔堂本堂で俺は天国か地獄どっちかにいくか決められるってことか？
いままで悪い事はそこらへんにいる悪がき程度にはしてきたけど。
「何をしているんだ。早く入るぞ」
「えっ！？」
間髪いれず扉を開けて俺の襟首をを引っ張った。
まだ、心の準備が。
俺の想いとは裏腹に足は一歩踏み入れていた。
ああ、入ってしまった。
洞窟みたいな内観をしているけど明るい。中はかなり広く、奥には大きな机、その上には大量の紙の束が置いてあるだけで誰かがい

るようには見えない。よく見ると机のさらに奥には天国、地獄と書かれ二つの空洞らしき物がある。
らしきとは、二つの入り口にシャッターらしき物がしまっており工事中と書かれていた。
なんだ、一体？
「閻魔様、七瀬伊織をお連れしました」
「……」
莢先生がの言葉に何も反応は無い。
莢先生は机に近寄りその上に積まれた紙をおもむろに一枚取って見ると莢先生の額にぴきりと青筋を立てた。
懐からミニ黒板のような物を取り出し、机の向こう側へ姿を消した途端。
「！」
「っ！？」
かなり不快な音がして、悲鳴が聞こえ、がたっと音がして積まれた紙の束が崩れ奥が見えた。
「何するんじゃ、莢」
「何するんじゃ、じゃないでしょう、私たちが休む間もなく働いているというのに閻魔様はノルマこなさずに寝てるなんて」
「そう言われても、一ヶ月寝てないんじゃよ？」
「気合いでどうにかしてください」
「うわぁ」
何かかなりすごい事言ってるよ。
「あの」
「ああ、すまない。七瀬」
「お、そやつが七瀬伊織か」
「はぁ」
さっきいた鬼さん達もでかかったけど目の前にいる鬼は一際大き

かった。
何だか、偉そうなひらひらした服を着て、威厳のある髭を生やした鬼なのだが、今ので威厳が薄れている気がする。
「七瀬、この方が閻魔様だ」
「はぁ、どうも」
「元気がないのぉ、最近の若い者は」
そんなどこにでもいるおっさんのような事を言う。
「はぁ」
「どうした、七瀬」
心配する莢先生の声が聞こえるが、ただ、さっきのやりとり拍子が抜けているだけだ。
「いや、あの」
「そんなに呆けていると、地獄に落とすぞ」
「！？」
閻魔帳と書かれたノートのような物を開いて口を開く。
「七瀬伊織、１９８６年１１月８日にて七瀬家の長男として生まれる。が、その五年後、両親が仕事で出張するため、両親同士仲の良い秋山家に預けられる」
「なっ」
「十一の頃、覗きをしたと……」
「わ～、ＷＡ～」
「目が覚めたか、小僧」
このおっさん、人のプライバシーを。しかし、これが素行調査なのかすごいな閻魔などいらないかのようだ。
「おっさん言うな、それに儂にしか閻魔は務まらんぞ」
ずさっと一歩引いてみた。
な、人の心を読んだ！？
目の前にいる閻魔のおっちゃんは得意げにしている。
「閻魔様、遊んでいる場合じゃない無いでしょう」

「そ、そうじゃな」
閻魔のおっちゃんはどうやら莢先生に弱い様である。
ありゃ、奥さんの尻に敷かれるタイプだな。
「七瀬伊織、儂に嫁などいない」
そう言うと、机の上の紙の山をどかして座った。
「七瀬、ここまで来い」
莢先生に指された所、机の前に立つ。
「七瀬伊織、お前の逝き場所なのだが」
「あっ」
俺、死んでるんだっけ。
閻魔のおっちゃんはどこぞのクイズ番組の司会者並にすごんでいる。
まさか、地獄逝き？
「七瀬伊織、お主の逝き場は……」
固唾を飲む。
「逝き場は？」
天国でありますように、天国、天国。
ただ、祈るばかり。
「ない」
ない？ないってどこ？
「じゃから、ないんじゃ今現在天国と地獄は工事中で入れないんじゃ」
「はっ？」
どういうこと？

≪続く≫

やっぱり非日常

ないって何？　工事って何？
「もう一度聞きますけど、マジ？」
閻魔のおっちゃんは迷い無く頷く。
「まじもまじ、本気と書いてマジと言えるくらいじゃ」
それじゃ、意味が変わるのでは？　……ってんな事言ってる場合じゃない。
「何で？」
「それはだな、最近戦争や自然災害があったじゃろう」
「ああ、そう言えば」
確かに、ここ最近、戦争が起きたり自然災害が連続に起こっていた。
「そのおかげで死者の魂が増えてしまって天国と地獄は今超満員なんじゃよ。そのための拡張工事を行っているんじゃ」
「なるほど」
閻魔のおっちゃんにも予想外だったてことか？
「まぁ、前から天国と地獄の拡張工事は求められていた筈なのにそれを閻魔様が疎かにして今さらする事になっただけだ」
ぼそりと俺の後ろから呟く莢先生。
ピシッ
瞬間、空気に亀裂が入った気がした。
「ほ」
本当ですか。
「それは言わない約束じゃろ」
と、言おうとしたら閻魔のおっちゃんは莢先生にいつの間にか泣きついていた。

ああ、本当なのか。
「何で、疎かにしてたんですか？」
問い詰めると。
「忙しかったんじゃよ、死者を裁く以上休みは無いのじゃ」
「むっ」
閻魔のおっちゃんの言い分は正しい気がする。
あまり思いたくは無いけど人は毎日のように死んでいる。死者を裁くと言っている以上どうしようもない事なのかもしれないけど。
「三ヶ月前に草津へ行くといって有給をとってましたけどね」
またも呟きが聞こえる。どうやら声の主もそうとう怒っているようだ。
しかし、有給ってあるのかそんなの。というか、草津にいったのかよ、このおっさんは。
「草津はいいところじゃぞ」
「……」
俺の思った事をまた読んだのかそんな事を言うおっちゃん。そのおっちゃんを冷たい視線で見つめる方が一人。
なんかどうでも良くなってきたような。でも何かむかつくからおっちゃん相手に敬語は止めよう。
「はぁ、で俺はどうするんだ？　おっちゃん」
「そ、それはだな」
待ってましたと言わんばかりの勢いでさっきの椅子に座り偉そうに構える。
もう威厳を感じねーな、このおっさんから。
「現世に行ってもらおうと思う」
「はっ？」
閻魔のおっちゃんの言葉はまた予想外な物だった。
現世って俺が生きてた所だよな。現世に行くって事は生き返るっ

て事か？
「早とちりするでない、現世に行っても最早お主の身体は無いのだ。お主が生き返るわけではない」
「なぁんだ」
期待し損か。
俺の中にあった望みはあっさり打砕かれる。
あれ、そう言えば。
「俺の身体は無いってどういう事だ？　だってここに…」
「七瀬、さっきも言ったが今のお前は魂のみで肉体は無い」
「あ」
自分の身体を指そうとした指を元に戻した。
そう言えばそうだった。
「それにお主の身体は燃えて骨になっている」
「ほ、骨？　何で」
「お主の家は仏教じゃろ、ならば埋葬ではなく火葬であろう」
「お前は事故の後二週間意識を失っている間に葬式は終わった」
そうかそりゃそうだよな、起きたときに二週間も経っていればなぁ。
ふと起きた時の事を思い出す。
「そう言えば、俺が起きた時にぶつかった壁は何ですか？」
後ろにいる莢先生に顔を向ける。
「あれは意識を失ってしまった魂を保護するための結界だ」
「魂の保護？」
頷いて続ける莢先生。
「そうだ。魂が剥き出しの状態はとても危険なんだ、だから私は結果をはった。本当は今の七瀬も危険だ。が、霊界とは言わば魂の世界だから今は気にしなくていい」
「はぁ」
今は気にする事は無いと言う事か。
「でも、もし魂を保護できなかったら」

「魂は丈夫ではない簡単に傷ついてしまう。魂が傷つくと自我がなくなり妖怪になるか、悪霊となるかだ」
その出てきた言葉はあまりにも意外だった。
「妖怪って、うそだ～。冗談きついですって」
はぁと息の次に事実だという声が聞こえた。
「本当じゃぞ、それに近いうち本物も見れるぞ。きっと」
「はい？」
今何つったこのおっさん。
「お主が現世に行く理由はそれじゃからな」
まさか。
「妖怪退治？」
「惜しい」
惜しいのかよ！？
≪続く≫

思い

雨が降りしきる中で秋山紅葉は二週間前に事故があった道路を見つめ立ち尽くす。
立っている少女の瞳には光り無く二週間前とは容姿が変わってしまったと思えてしまうほど生気が
無かった。
「伊織」
少女はもういない少年の名前を呼ぶ。
「伊織、伊織」
満ち足りた幸せ、傍にいてくれたらそれだけで幸せにしてくれた人の名前。
「伊織、伊織、伊織」
護ってくれると言ってくれた人。
私は、私は貴方の事が……。
「紅葉？」
真中綾子の声が聞こえないのか紅葉の反応は無い。
「あ…やこ？」
濡れた肩に手を置かれてようやく綾子の存在に気付く。
（つ、冷た）
「ちょっ、あんた部活も来ないでずっとここにいたの？」
「え、あ」
反応は鈍いながらも頷く。
「まったく」
「え？」
腕をとって綾子は歩き出す。
「綾子？」
「そのままじゃ風邪をひくから。とりあえず、あたしの家の方が近いしな」

「えっ？」
再度足を進める。
「綾子、私は…」
ここからいなくなる事を拒むように紅葉は足を止める。
「うるさい！」
「綾子？」
滅多に怒らない綾子のあげた怒声に驚きを隠せず呆然とする。
「なぁ、紅葉。あんたが今こうしている理由も解らなくはないよ、でもこうしていて風邪をひいたら
七瀬は喜ぶのかな」
伊織の名前を出されて僅かに動揺しつつも綾子の紅葉を心配している目を受け止める。
「じゃ、行こう」
そう言って笑った笑顔でいてくれた綾子に感謝しつつ紅葉は頷いた。
二人は一本の傘に入って帰路へつく。

『そういうことなんで、とりあえず紅葉を家に泊まらせます。はい、すいません突然』
「いいえ、ありがとうございます。紅葉のことよろしくお願いしますね」
『あ、はい。任せてください』
「それでは、失礼します」
そう言って秋山亜希子は電話を切った。
亜希子は居間に行って紺色のソファーに腰をおろす。
目の前にはここ何年も置かれる事のなかった写真掛けに入った写真がミニテーブルの上に置かれていた。
「伊織さんは貴方に似ていると思っていましたけど、ここまで似て

いるなんて思いませんでしたよ、
一弥さん。
伊織さんは紅葉を護ってくれました。そしてあなたと同じように
…」
亜希子は肩をふるわせていた。

シューとやかんの蒸気があがる。
「よし、亜希子さんには伝えといたよ」
そう言って綾子は何も無かったかのように接してくれました。
「ココアでも飲む？」
電話の子機を置いて台所に立つ綾子。
何でもないこと。
それが嬉しくて、ありがたくて涙が出てしまいました。
「できたよ…って紅葉？」
涙を溢れさせている私を心配してくれる。
「何処か痛いのか？」
首をふって応える。
「じゃあ…」
「違うんです」
「違う？」
「はい、綾子が優しくしてくれたから」
そう言ったらもっと涙が出てきた。
「いや…」
その涙が余計に綾子を困らせてしまうけど、それでも止まってはくれない。
「綾子がいなかったら私はどうしていたか」
本当に、本当に。
「ありがとう」
「……どういたしまして」

そう笑顔で応えてくれた。
「じゃ、ココアを飲もう。あたしがせっかく入れたってのに飲まないなんて損するぞ」
「はい、頂きます」
気づくと涙は止まっていた。
白いマグカップに入ったココアを受け取って一口。
「おいしい」
「だろ」
綾子の入れてくれたココアは丁度いい甘味引き出して冷えた身体を温めてくれた。
「それ飲んだらお風呂に入んなよ、今、沸かしたから」
「はい」
窓から外を眺めながらココアを飲む。
伊織、私はあなたが好きです。今さら言っても伝わらないでしょうけど好きですよ伊織。
雨が降りしきる空を見て少女は思う。
＜続く＞

新学期

「静かに」
今は朝のＨＲ時に莢先生は生徒に呼びかけるが今回ばかりは収まらない。
莢先生は生徒に尊敬されていないわけでもなく、逆にかなりの人気を有している。
なら、何故今回ばかりは静かにならないのか。
この妙な時期に転校生が来るから？
無論それもあるが、それ以上のことなのだろう。
「あの白河先生」
一人の男子生徒が恐る恐る手を挙げた。
「ん、なんだ？」
「なんで２―１の担任である先生が２―３の教室にいるのでしょうか？」
「知りたいのか？」
莢先生は威圧するような声をかける。
「いや、その」
汗だくになる男子生徒。
「知りたいのか？」
さらに重圧をかける莢先生。
「う」
うめく男子生徒と当然他の生徒達はそれ以上聞ける訳なく教室は静かになった。
「じゃ、出席をとるぞ」
２―３の出席をとりおわった後クラス内の緊張が高まった気がした。
かくいう俺も緊張している。

「じゃ、転校生入ってきていいぞ」
「は、はい」
緊張で声が震える。
うわぁと言う感嘆を帯びた声が聞こえた気がした。
「八ノ瀬　律です。よろしくお願いします」
『……』
反応は沈黙。
まさかばれた？
ぴくりとも動く気配がない。
やっぱりばれたのか？
が、そんな事もなかった。
何故か男子、女子ともに拍手喝采。かわい～等の声も聞こえた。
よかったと安堵の息が出た。
さて、お気づきの方もいるだろう、この栗色の綺麗な髪をおさげで二つにして、ぱっちり二重、丸みを帯びたたまご型の輪郭。自分で見ても美人だと思う俺の本性は七瀬伊織である。何故俺と莢先生がこうなったのかそれは三週間前、霊界に行ったあの日閻魔のおっちゃんはこう言った。
「秋山紅葉は妖怪に狙われていると」

～三週間前～

「ちょっと待てよ、紅葉が妖怪に狙われている？」
「やめろ七瀬」
今は莢先生の声は聞けない。
「なんでだよ、しかもその妖怪が」
「正確ではないが、恐らくそうだろう」
おっちゃんの声は冷たい。
「だから、なんで」

「憎しみだろうな恐らく、が詳しい事はわからぬ。いくら我々でも死後は調べられん。霊界に来ぬ限りな」
憎悪ってなんで？　じゃあなんで。
「七瀬いいから下がれ」
莢先生の言葉どおりおっちゃんから離れた。
「……」
「それでどうする気じゃ？」
当然の事を聞いてくる。
「紅葉を護る」
そうおっちゃんの目を見据えて言った。
「どんなことがあろうと？」
「ああ」
おっちゃんは満足のいく答えを聞いてニヤリと笑った。俺はこれに答えたのに少し後悔をする事になった。

目の前には見知らぬ俺が通っていた高校のセーラー服を着ている女の子が一人。
「ちょ、ちょっと待ってくれるとすごくありがたいかもしれないのですが」
「そんな時間はない」
「うわぁぁぁぁ！」
閻魔のおっちゃんは俺を掴んで女の子に向かって投げた。
「騒ぐな、まったく情けない。で、どうじゃ」
「……どうって」
少し立ちくらみする中で自分の身体を見る以前の俺とは違って細身の身体。
「何故に女子」
「仕方あるまい。お主の肉体は無いのだから、それに秋山紅葉は女だからな、その身体の方が何かと

やりやすかろう」
「うう」
確かにそうかもしれないけど。
「腐ってる暇はないぞ。身体は動くか？」
「ん」
手をにぎにぎと動かす。今までどおりに身体は動く。
「大丈夫だよ」
「そうか、ではその身体について説明しておこう」
「あいよ」
「その身体は霊力で構成されたものだ。が、現世の肉体とは変わりない」
確かにそうだ何の違和感も無い。
「食欲もある。排泄もできる。痛みを感じる等も同じだが一つだけ違う」
「一つだけ？」
うむとおっちゃんは頷く。
「ここを出て一ヶ月しかその身体は維持できない。一ヶ月たったらお前は莢に霊界に連れてかれる」
「ちょ、ちょっと待ってくれ、その一ヶ月の間に妖怪を倒せなかったら」
「その心配は無用じゃ、お主がここを出てから一ヶ月経ったら工事も終わっているから処理人を送る」
ああ、そういえば俺が現世に行く理由は工事で人が足りないからだったか。
「わかった」

とまぁ、こう言う事である。紅葉を護る為にこの身体なのだ。
そして、何故、都合よく同じクラスに入れたかというと。

閻魔のおっちゃんの力だそうだ。現世に介入しようと思えば幾らでもできるらしい。因みに茨先生が移ったのも同じ理由なのだ。
「八ノ瀬、あそこの席に座れ」
「えっ、あ、はい」
茨先生の指した方の席に向かった。
「はじめましてです。八ノ瀬さん」
隣には紅葉がいた。
「私は秋山紅葉です。よろしくお願いします」
「よろしく、も……じゃなくて秋山さん」
「はい」
紅葉は元気だ。茨先生が俺が死んでから酷く落ち込んでたって言っていたけど。
「……」
紅葉は笑顔で俺を見る、七瀬伊織だった時もいつも笑顔だったでも。
「どうしました？」
「ん、なんでもないですよ」
「そうですか」
「じゃ、次の授業頑張れよ」
そう言って茨先生は出ていった。
すると、クラスメイト達が俺の周りにいた。
「ぬおっ！」
「どうも八ノ瀬さん」
どこかで見たような気のする人が多いな。
そこから授業が始まるまで自己紹介大会が始まった。
因みにこの時は敬語で話してるんだよな。閻魔のおっちゃんにキャラ作りだと言われて矯正されたんだよな。

授業は滞りなく終わり昼休みに入った。
「あの～、八ノ瀬さん？」
「なんでしょうか、秋山さん」
ん～我ながら気持ち悪い。
「お昼一緒にしませんか」
弁当箱を机に出して尋ねてくる。
「いいんですか？」
「はい」
一緒にいた方がいいかな。
「では、お願いします」
「はい」
そういって机を向かい合わせにする。
「あたしもいいかい？　八ノ瀬さん」
後ろには真中綾子が立っていた。
そういえば、こいつも紅葉と同じクラスだったか。
「構いませんか？　八ノ瀬さん」
「ええ」
「よかった、私は真中綾子」
やっぱ違和感あるなぁ。知ってる人と自己紹介って。
「よろしくお願いします、真中さん」
「……」
真中からの反応は殆ど無いというか笑いを堪えているように見えるような。
「綾子？」
「……よろしく、八ノ瀬さん？」
何か変だ。何か隠してないかこいつ。
「なに？　八ノ瀬さん」
「いえ、なんでもないです」
昼食を開始した。

「八ノ瀬さんは随分遠くからいらしゃったんですね」
「ええ、そうなんですよ」
「……」
「えっ、私の家の近くにご自宅が」
「そうだったんですか」
「……」
さっきから妙な視線を感じる。
「どうしたんですか、綾子」
「なぁ、八ノ瀬さん、敬語やめないか」
『えっ？』
紅葉と声が重なる。
「誰が喋ってるかわかりにくい……もとい元々そういう喋り方じゃないだろう？」
うっ、鋭い。
「ばれた？」
もう面倒くさくなってきたしまんまでいいか。
「うん、結構頑張ったみたいだけど」
さよか。ばれてんのなら仕方ないか。
「わかったよ、このまま話せばいいんでしょ。真中さん」
一応女の子らしい喋り方にしとこう。
「よし」
にししという擬音語あいそうな笑い方をする真中。
「あと、私たちの中で敬称を付けずに名前で呼ばないか？」
そんなことを提案してきた。
「私は構いませんけど」
うっ。
じーという二人の視線が集中する。
「私も構わないよ」
「よっしゃ、じゃ決まりだ。いいね？　律」
「はいはい、綾子に紅葉」

よしよしと二人は頷く。
そんなこんなで昼休みは終わった。

「それじゃあ、やるか」
学校も終わり放課後、化学準備室にて莢先生と俺と約一振り。
（約一振りとは何だ）
頭に低い稲妻のような重厚な声が響く。
「違うのか？」
鞄から一本の短刀を取り出す。
「見た目は刀だろう？」
（ぐっ）
図星をつかれたのか零式はそれ以上何も言い出さなかった。
「何をしている、八ノ瀬。秋山の部活が終わるまでやるのだろう」
「わかってます」
「じゃ、つなぐぞ」
壁に真円を描きそこに両手をつく。
「開」
壁には真っ黒い穴が穿たれた。
「入っていいぞ」
「ありがとうございます」
その円を潜ると世界は一面の闇。
ここは現世とも霊界とも隔絶された世界。
そしてここは俺の修行場である。

≪続く≫

喋る無機物と

「では修行を始める」
「修行？」
八ノ瀬律の身体に入ってから五時間後くらいにそんな事を言われた。
「うむ、秋山紅葉が狙われる理由は何か覚えておるな」
「ああ」
紅葉の魂は高密度の霊力を収めている。
霊能力者でない限り、そういった魂には莢先生たちのような死神と呼ばれる人たちの霊力が収まっているとのこと。
どういうことか、と聞くと霊界での仕事のためと言われた。霊界で働いている人たちには危険な仕事、以前言っていた処理係と呼ばれる妖怪、悪霊などの退治を目的とされた仕事。この仕事には多大な霊力を必要とされるがその霊力は生前のころと反映する。だけど魂のみの状態でも鍛えることはできるらしい。しかし、これだと時間をかなり消費してしまう。その上この仕事は危険が付きまとう。
処理係の魂が妖怪たちに食べられるのも少なくないとの事。そこで、おっちゃんは魂の還元の応用をしたらしい。魂の還元、解りやすく言えば輪廻転生である。返り討ちにされた処理係の魂をその時の霊力を持ったまま転生させるんだそうだ。その霊力が紅葉に宿ってるとのこと。
そういった高い霊力を持った魂を魂喰らいの妖怪たちにはごちそうらしい。
だけど、その霊力を抑えられれば妖怪たちにもわかりにくい、だから。

「その為に俺が行くんだろう」
「うむ」
何故、妖怪やら何やらに疎い俺が紅葉を護れるのか、それは紅葉の魂の霊力の気配をを隠せるからだそうだ。
闇魔のおっちゃんはそれを魔祓いと呼んだ。
魔祓い、魔の類を寄せ付けることのない力。
これらは生まれつきのものだそうだ。こういったものはいかに訓練しようとも身につくことのない異能の力。
今までこの魔祓いが紅葉の魂を隠していたらしく狙われる事のなかったとの事だ。
つまり俺がいれば紅葉の危機は防げる。
「しかしだ。お主がいない間に妖怪が気付くかもしれぬ」
「でも、俺が入れば平気なんじゃ」
「ある程度鍛えてしまえば、魔祓いを抜ける事ができる」
「でも気付かれてないんじゃ」
「お主が死んでから二週間たっとるから、わからん。今は秋山紅葉にはひとり付いてはいるが複数でこられたら太刀打ちできん」
一人と言うのは莢先生の事だろうか。因みに増援は無理との事、紅葉以外にも護るべき魂があるらしい。
「わかった」
「うむ、ではこれを」
闇魔のおっちゃんはそういうと黒い丸薬を取り出した。
「何それ」
「いいから、飲め」
黒い丸薬は俺の口に放り込まれた。
「ん、ぐ……苦っ」

青汁よりニノジュースより苦い。
「何すんだ。いきなり。飲んじゃったじゃないか」
「少し黙っていろもう少ししたら来る」
「来るってなっ……」
か、身体が熱い、何だこれは！
「相変わらずの速攻性だな」
あっ？
　閻魔のおっちゃんが何を言っているか全然聞こえない。
「がっ」
手足の感覚が麻痺して動く事が出来ない。
身体から何かが無理矢理出てこようと暴れて身体が軋む。
　何だこれは？
熱い。
「ぎっ」
身体の中の熱さが増していき声もまともに出せない。
「少し耐えろ」
耐え・・・ろって
「無茶言うな・・・ってあれ？」
身体に熱はまだ篭っているがさっきよりは大分おさまっている。
「ふぅ、でこれはどういう事だ」
体内の熱を出すように息を吐く。
俺は気を落ち着けてから閻魔のおっちゃんを睨む。
「うむ、さっきのは無理矢理霊力を引き出す薬だ。時間が無かったので使わせてもらったんじゃ」
「あれ？俺は霊力を放ってるんじゃなかったのか」
さっき閻魔のおっちゃんが言っていたような。
「魔祓いは存在を知らなくともそれだけで効果がある。」
そういえばそんな事が出来ること自体知らなかったっけ。
「お主、自分の異変に気付かぬのか」

俺の身体を指差すおっちゃん。
「えっ？　うわっ！」
身体から何かが噴き出ていた。
「何これ？」
「それが霊力じゃ。自身に眠る力、生命力とも言われている」
せ、生命力って、しかもこの雰囲気だとまさか。
「このまま出し続けるとまずいんじゃ」
「その通り、そのままじゃと転生するぞ」
やっぱり。
なんかどこかで冷静になってる自分がいる。
「どうすればいいんだ？」
「自分の内に抑えるイメージをそしてそのイメージを体内に血脈の如くの巡りを保て」
保て、ってそんな簡単に言われても……って持たないと死ぬのか。
抑えるようなイメージ、そこから血の流れをイメージする。
「心臓、脳、腕、脚。そして左側へ」
おっちゃんの言うとおりの流れるイメージ。
「うむ、もういいぞ」
「えっ？」
身体から溢れていた霊力は静かに身体を纏っていた。
「それだけ、安定していたら平気じゃろ」
汗が頬を滴る。
「えっ？　うわ」
全身が汗だらけになってる。
「霊力の扱いになれていなかったから疲労もでかかったのだろう」
そうなのか？　そういわれるとかなりしんどいな今。
「だが、休むのはまだだ」
「げっ」
まじかよ、もう風呂に入って寝たい。
「ほれ」

投げられた一振りの漆塗りの鞘に収まった黒い柄の短刀。
「これは？」
「抜いてみろ」
言われたとおり引き抜く。
「えっ？」
鞘の中を覗いてみる。
四次元にはなってないな。
「何をしておる」
「何ってこれは何？」
握っている短刀だった物をさす、俺の目の前にあるのは刃渡り６０ｃｍはある刀だった。柄もそれに合わせて長くなる。
鞘は精々３０ｃｍ程度、四次元にでもなっていない限り収まらないだろう。
「霊刀零式、妖怪悪霊に対して有効な武器じゃ」
「いやそう言う事でなくて、何で刃が伸びてるんだ？」
「ああその事か、零式は持つ者の霊力に呼応する。霊力を扱えれば調整できる。故に、槍とも弓とも言われる」
槍？　弓？　刀なのに？
「下らん事を言ってる場合ではなかろう」
「はい？」
何だ今の声はおっちゃんのものではないし。
「説明は必要じゃろう」
おっちゃんの目は明らかに刀へ向いてる。
「ふん」
刀から声が聞こえる。もう、驚きたくないのだが。
「何を固まっているのだこの小僧は」
「うむ、刀が喋る事など早々あることではないからな」
「軟弱者め」

人が黙ってたらそんな事を吐き捨てやがった。このクソ刀は。
「てめー。無機物が会話なんぞしてるんじゃねえ」
「なっ、何だとこのくそ餓鬼が」
「うるせぇ、有機物でもないのに口きくな」
「こっ」
「ほれ、いい加減にせんか。これからパートナーになるのだから」
『あっ？』
見事に声が重なる。
「なに？　パートナーって」
「貴様は勝手に決めおって」
「まぁ、落ち着け。パートナーと言うか零式は妖怪を倒すには必要じゃ」
「うっ」
それはそうだ妖怪が出てきても俺に対抗する手段はない。ところが、この喋る無機物は妖怪に有効らしい。
「それと零式、お主にはこやつを鍛えてもらう」
「何っ！？　ふざけるな」
「仕方なかろう、ものを教えられることのできる霊具などお主以外ないのだから」
「しかしだな」
粘る零式。
「浜屋の羊羹でどうじゃ？」
物で釣れるのか？　そもそも物を食えるのかこの無機物は。
「仕方あるまい」
うわっ！　あっさり。
「よし、では修行を始める前に契約をしなくては」
「契約？」
契約ってあの紙に判を押したりするやつか？
「うむ、お主の魂と零式の魂を同化させる」

「同化させてどうするんだ？」
「お主の魂、もとい魔祓いが霊具である零式に少なからず影響を及ぼす」
　それでは意味がないと続ける。
「その為にお主と零式の魂の性質を同調すれば、零式には影響がなくなるのだ」
「なんで？」
「魔祓いを持つ者にその影響はない。対象物は本人以外だからだ」
「なるほど、俺と零式を同一の存在にするという事か」
　そうすれば魔祓いは俺であって零式になる。そうなれば零式に影響はなくなるということか。
「そうじゃな、いうなれば合体じゃ」
「合体か」
　その響きはカッコイイ。というか合体は男の浪漫だ。
「ふん、そんな説明はいい。始めるならさっさと始めるぞ」
「わかっておる」
「どうやって？」
「名を言いあえ、後はこちらでやる」
「名前？　またなんで？」
「必要なのだ当然であろう、契約するときに名を知らなければできぬのであろう」
　そういうものか。
「では、始める」
　物々しい空気に切り替わる。
「我が名は零式」
「俺の名前は七瀬……」
　で、いいのか？
「自分が思う名を使え」
　零式に言われた通り、自分の思う名前。
「七瀬伊織」

おっちゃんは頷いて、口を開く。
「宿主七瀬伊織は零式を裏切らず信じつづけ、零式は宿主の剣となり盾となれ」
俺と零式を柔らかい光が包み込む。
「これにて契約は完了した」
「何か変わったのか？」
「見た目は何も変らんよ」
（変わったといえばこうして意思の疎通ができるぐらいだな）
「うわっ」
頭の中に零式の声が響く。
「何これ」
（気にするな思うだけで会話ができるというだけだ）
へぇ、じゃあ零式のバーカ。
（ふん、その程度で怒るほど若くはないわ）
本当に通じている。
「さて、契約も完了したところだ。修行に行って来い」
トンと背中を押されると目の前に黒い空間が広がっていた。
「えっ」
「んじゃ、頑張ってくるんじゃな」
暗い空間に入るとおっちゃんの姿は消えていった。
「ちょっと待て〜！！」
叫ぶも声は闇に飲まれていくだけだった。

≪続く≫

修行

「暗いけど、周りを確認する事はできるな」
「そう言った空間だからな」
「……」
零式は抜身のままだ鞘は閻魔のおっちゃんの所に置きっぱなしだ。
こうやって見ると零式の刃って結構綺麗なんだな。
刀ってのはあまり解らないけど、こういうのを芸術と言うのかな。
「おい、来るぞ」
「来るって……ぬわっ！」
とっさに一歩横に飛んだ。
何か黒いものが俺のいた場所に駆け抜ける。
「なんだ、あれ？」
後ろに人型をした全身真っ黒な顔を持たない何か。
まさか！？
「のっぺらぼう！？」
「な、訳あるかぁ！　この阿呆」
零式の叫び声に警戒を持ったのか身構えるのっぺらぼう。
「違うと言っとろうが！　あれは影人だ」
「かげびと？」
ネーミングセンス微妙だな、おい。
「少し黙れ貴様、いいか影人は処理係を行うもの達の訓練用の人形だ」
「人形？　かなり動いてるけど」
というか、今にも飛び掛ってきそうなんですけど。
「動くのは当然だ。閻魔の奴が霊力を込めたのだから」
霊力で動くって事か……。
「うわっ！」
あきらかに俺を殺そうとしてくる影人の一撃を避ける。

「避けるのだけでなく攻撃せねば死ぬぞ」
「と、言われても刀の使い方知らないし」
「実戦で覚えろ、霊力の扱い方をな」
放任主義か。
「教えてもいいが、死ぬぞ」
今度は連続攻撃が俺の顔面目掛け飛ぶ。
チッ。
二撃目が頬を掠ると同時にこちらの体制が崩れる。影人はそれを見逃さず追随をかける。
避け切れない。
「えっ？」
キィンと言う音が何もない空間で響く。
影人は後ろへと跳ぶ。たった一息で十メートルは離れていた。
けど、それよりも気になる事が一つ。
さっきの一撃、俺の意思とは無関係に腕が動いた。
（このど阿呆が！）
怒号が頭に響く、怒ってる理由も解るけど。
「……今なんで、動いたんだ」
零式を持っていた右腕の感覚がなくなった。あれは……。
（ああ、その事か言ってなかったな）
「どういうことだ？」
（説明はするが、奴から眼を放すな）
影人の距離はここから十メートル近く離れているがさっきの動きから、ここはまだ奴の射程範囲に
過ぎない。
確実に俺を狙う殺気、人形とは思えないものを放ってくる。
（訓練用だが、実戦と同様にする為に影人は殺す気でくる。人形と言うより獣と考えた方がいい）
そう言う事は早く言ってください。
（ふん、言っても変わりはせぬであろう）

ごもっとも。むしろ、へたれるかもしれない。
（それより、先の話だ。あれは我が貴様を動かした）
は？　どうやって？
零式を構えて影人の襲撃に備える。
（契約により貴様と我の魂は同化している。つまり、我は貴様に対して干渉できる。ならば、貴様の身体を使えないわけではない）
なるほど。
（しかし、身体の主は七瀬伊織である以上、主導権は貴様にある。先刻のように操るのは貴様に隙ができない限りは介入できん）
そういうことか、俺の隠れた才能とかじゃないのか。
（落胆してる場合ではないぞ）
飛び出す影、それを迎え切り落す。
が、あっさりと避けられ、影人の一撃が腹に決まり五メートルはゆうに飛んだ。
「あっ、は」
身体にあった酸素が一気に排出される。
痛みを堪えるように蹲って、酸素を無理矢理吸う。
（振りが大きい。あれでは反撃してくれと言っているようなものだ。小さく細かく素早く動け）
小さく細かく素早くってこんな刀で、そんな動きできるのかよ。
（できぬのなら、できるようにしろ。何故、動けぬのか）
何故？　そんなの解ってる俺の動きが鈍くて、この刀だと長いんだ。俺だと扱えきれない。
（ならば、自分の思うように我を合わせてみせよ）
俺の思うように可能なのかそんな……！？。
蹲ってるせいで絶対とは言えない。けど、殺気でわかる。確実にとどめを刺しに来る。
ああ、もういいぜやってやる。

俺に合うように小さく早く動けるように零式を思い描く。
シュッ。
小さな気付かないような音、けどそれは確実に致命傷。
「ぐぎゃあああああああ」
うわっ、すげぇ声。
人では出せないような断末魔。
（上出来だ）
鞘よりも短くなってしまった零式の声は笑っているかのように聞こえた。
鞘？　ああ、そうか闇魔のおっちゃんがそんな事を言ってたっけ。零式は霊力次第で調整できると。
（そのとおりだ。とりあえずこれで第一段階終了だな）
聞き捨てならない言葉が響いた。
第一段階？　なにそれ。
（うむ、とりあえずは我の扱いを知ることこれが第一段階だ）
つまり、まだやると。
（当たり前だ。ここからは戦い方に霊力の扱い方を覚えてもらうぞ）
うう、休みはないのか。
（当然だな。余所見している暇はないぞ）
余所見って……殺気を背中から感じるような。
「ぎ、ぎっぎっ」
獣のような声を出す影人が四つん這いでこちらを睨んでくる。って、眼はないけど何となくそんな気がする。
もう、人型とは言えないぞあれ。
目の前にいる黒い物体は四肢が変形していて見たまんまの獣だ。
（影人も一段階上がる。ま、がんばれ）
うわぁ、零式が多分かつて無いほどの軽いセリフを言った。

≪続く≫

変わり目

放課後に入った隔絶された闇の世界。
「なぁ、ここってどうなってるんだ？」
（ここは霊界と似たようなところだ。本来は処理係が訓練するための世界だ）
なるほど、セットであれもか。
「ぐるる」
あからさまな獣のうめきが聞こえる。最早、獣と呼ぶに相応しい影人。
鞘よりも短くなった零式を逆手に持って身を低くして重心を前にかけて構える。
零式に教わった霊力の扱い方は簡単なものに聞こえた。

（霊力は身体に流れる血液と同じ物と考えていい）
それは闇魔のおっちゃんから聞いてる。
（そうか、ではその霊力を必要だと思うところに集中させるイメージしろ）

との事だった。簡単に聞こえるが、制御するのも難しく比率を考えなくてはならない。
霊力をただ普通に使っていなければ身体に纏うだけだ、しかしそれだけで防御力は増す。零式の言う事は例えば脚に全て集中させたとする。これにより今までと段違いの脚力であるが脚以外は普通の身体になってしまう。ただの攻撃ならば、まだいい。けれどその攻撃に霊力が使われていたら、俺の身体はあっさりと壊れるだろう。
つまり、ここで必要なのは霊力の割り当てとすぐに戻す事である。
さて、改めて目の前にいる敵の観察をしよう。
影人は速い、アレは隙をつかないと勝てる気がしないが、例え脚

に霊力を集中させても一直線にしか動けない。一度試してみたらあっさりとカウンターを喰らって気絶したらしい、零式曰く。
が、今の俺に隙をつく方法はスピードで撹乱させる事くらいしか思いつかない。前の経緯から見れば多分脚に霊力を集中させれば、こちらの方が速い。
ならば、方法は一つ。
頭にシュミレートを一瞬で巡らせる。
覚悟決めて、重心を前にかけて影人に向かって、走る。
恐らく影人には俺が僅かにしか見えていない。けれど、俺が進める方向は直線のみ。ならば凶器ともいえる爪が生えた前足を振ってしまえば俺に当たるのだろう。
ザンッ。
が、振った一撃は空を切り、首が切り落されていた。
「？」
影人は何が起こったのか気付かない。
当然のように当たるはずだった。何故、対象が消え自分の首が刎ねられているのか。
それから、影人が動く事はなかった。
「よし」
どうにか出来た。影人の攻撃を引き付けて当たる瞬間に俺は走るときと同じ要領で上に跳び、影人の上にきた時に首を刎ねた。
しかし、いくら妖怪やらの類に強いからといって切れ味が良すぎだなこれ。
（……）
「零式？」
（む、なんだ？）
「いや、これからどうすればいいんだ」
影人は動く様子はない。壊してしまったかもしれない。しかし、こちらとて殺されてしまうかもし

れなかったのだ。
（今日はもう終わりだそろそろ時間であろう）
「えっ！　もう？」
腕時計を確認すると部活が終わる頃だった。

「なんで、莢先生に呼ばれたんですか？」
紅葉達の部活も終わり帰る中、そんな話が始まった。
「えっと、転校してきたばっかりだったから。学校の方の案内と教科書とかの説明を受けてたの」
「そういわれればそうだよな」
綾子が莢先生の作った言い訳に相槌を打つ。
「案内なら、私たちに言ってくれればやりましたよ？」
「いや、部活があったから」
紅葉に突っ込みをいれる。と、そうですけどと言った紅葉の顔が少し寂しそうに見えた。
「じゃあ、明日の昼休みに頼むよ」
まぁ、そもそも案内されてないし。
「え？　でも」
「案内されたの全部じゃなかったからね。それに昼休みなら空いてるでしょ」
「はい」
「それはあたしもいいのかい？」
「ああ、お願いするよ」
そうかいと笑って答える。その笑い方は何か年寄りじみてるように思えた。
「っ！？」
瞬間、背筋に悪寒が走る。
……今のは、殺気？
「どうしたんですか？」

紅葉はどうやら気付いてないようだ。いや気付かなくてよかった。
「なんでもないよ」
話題をそらそう。紅葉には関係のないことだから。
「綾子？」
紅葉の声につられて見ると真中綾子は俺らが来た道にある雑居ビルを見ていた。
「うん？　何でもないよ。悪いけど用事を思い出したんでここで失礼するよ」
「えっ？」
言うが早く走り出してしまった。
「何なんでしょうか？」
「さぁ」
……まさかね。
ひゅうと吹く冷たい木枯しが考えるのをやめさせた。
「寒いですね」
「うん」
おっちゃんに支給されたフード付きの白いコートにマフラーの完備、それに対して紅葉はフードのついてないダッフルコート、それにマフラーをしていないそれでは首元が寒いだろうに。
「はい」
紅葉の首にマフラーを巻く。
「えっ、いいですよ」
「気にしない、気にしない。私のはフードもついてるから暖かいんだよ」
「そうですか」
紅葉はありがとうございますと言ってマフラーを見る。
「ふふ」
「何か面白い？」
「いえ、この巻き方が……」
紅葉はそれ以上続けずに俯いてしまった。

「大丈夫か？」
「あ、大丈夫です。ごめんなさい」
そう言って紅葉は笑顔を作る。
「……」
あきらかに嘘。でも、誤魔化そうとする笑顔を見て何が言えるのだろう。
「じゃあ、帰ろうか」
「はい」

「それじゃあ、律また明日会いましょう」
「はい、じゃね」
紅葉が家に入るのを確認して向かいの空地だったはずの家に入る。
「ただいま」
野太い声でお帰りと返ってきた。
このかほりは……カレーか。
学校帰りの学生の腹を抉るような匂いに耐えながら自分の部屋に上がる。
改めてこの家を見ると凄い。
部屋の中はベッド、タンス、机、その上にはそれなりの値段がしそうなカレンダー付きデジタル時計等が置いてあるだけなのだが、感嘆するのはそこではなくこの家自体である。
そもそも、ここは元々は空地だったのだが閻魔のおっちゃんが家が近い方が牽制になっていいだろうという理由でその空地に一日で家をおったてたのだ。しかもその土地の権利書を持っているわ、気付いたら住民票持っているわ、しかも国民保険にも入っていた。どうやったのかと理由を聞くと閻魔だからしい。

とまぁ、突然家が出てきたら周りの人間が騒ぐはずなのだがそこはさすが閻魔というか周りの人間にここは空家だったような気がしたと思わせることだった。
何故、完璧に記憶を変えずにそんな曖昧な捉え方をさせたのか。第一の理由は生者の記憶を無理矢理変えるのは危険だと言う事。第二にその方が楽らしい、人間というのは曖昧な記憶でもそこにあればそうだったと納得してしまう節が多いからだそうだ。
「律、飯が出来たぞ」
「今行く」
とりあえず、着替えよう。
制服を脱いでハンガーに掛けて、箪笥から上下のジャージを取り出す。

「いい匂い」
居間に下りると、部屋の中心にあるテーブルの上にはカレーライスが盛りつけらた皿が二つ。
テーブルを挟んだ向こうには熊のような大きさのおっちゃんが一人。
目の前にいるおっちゃんは間違いなく閻魔を名乗る鬼だ。何故ここにいるかそれは。
「わしも行きたい」
の一言で始まった。無論、俺や莢先生も止めたが、行くといってやめる気はなかった。
「仕事は向こうにいても差し支えない。わしが入ればある程度のトラブルはかいくぐれる」
その言葉に零式が賛成したのもあっておっちゃんはここにいる。
まぁ、この家もおっちゃんのおかげなわけだが。
「何しておる。食わねば冷めてしまうぞ」
「あいよ」

このほかほかのカレーを作ったのもおっちゃんである。
「何だ、その言葉使いは。ちゃんと教えただろう」
「ああ、でもすぐばれたから」
何？　と言って眉毛をぴくりとさせた。
「ばれたと言うのは誰にだ？　秋山紅葉か」
「いや、真中綾子って言うんだけど」
知らないだろっと聞くとおっちゃんはため息を吐いた。
「あやつか」
なら仕方ないか、などと呟きが聞こえる。
「何でおっちゃんが知ってるんだ？」
「ん？　言ってなかった……」
『！？』
玄関から何かが倒れる音がした。顔を合わせて席を立つ。
「ぬっ！」
「はっ？」
おっちゃんの動揺と俺の困惑のうめきが漏れる。
玄関に倒れている人物、それは。
「綾子？」
そこにいるのは傷ついて気を失っている真中綾子だった。
「何をしておる。地下に連れて行くぞ」
「わ、わかった。後で説明してもらうからな」
今、説明して欲しかったが綾子から溢れ出る血を見ていたらそれどころじゃないと理解できる。綾子を地下へと運んだ。

≪続く≫

修行２（前書き）

文章中に疾走ると書いてありますが、はしると読みます。
誤字ではないです。

修行2

ここらで二番目に高い雑居ビルの屋上に黒い影が一つ。
「やっぱり」
真中綾子は一足でその屋上に辿り着いた。
黒い外套を着た長身の男の背後に立つが男は振り向かない。
「あまり殺気は見せないほうが良いんじゃないかい？　それだとすぐにばれる」
「何故だ」
男は綾子が現れた事に対する動揺の素振りは無い。
「何故、あれがいる」
男の眼には一人の少女が映る。
「あれは、私が確実に殺したはずだ」
「そうだねぇ、七瀬伊織はあんたが殺したよ。それは霊界にも記録されている」
「なら……」
「閻魔様があんたを近づかせないようにという配慮だよ」
「何故、邪魔をする。貴様もあの餓鬼も」
男の声に憎悪が混じり、空気が凍結し、男は消えた。
「っ！」
突如として眼前に現れ、振るう拳に反応して蹴りを返す。向こうが離れた隙に間合いをとる。
今のは……こいつ、強い。
真中綾子は初めて相対して前にいる敵の認識を改める。
「少し気になるねぇ」
反応はない、さらに攻めてくる。
最初は蹴り、次にアッパー気味の拳が顎を狙う、さらにこめかみを狙うフックともいえるパンチが疾走る。が、それを全て捌ききる。
「まったく、人の話を聞かないともてないよ？」

しかし、予想外。軽口聞いてる暇は無いか。
攻めを逆転させる。牽制に放つ空手じみた正拳づき、そこから右回し蹴りは寸前で避けられる、が
そのまま足を踏み込み放つ裏拳が顔を捕らえる。
「ぐっ」
僅かに怯む、その隙を逃さずに追いかける。が、黒い男は消えた。
また、やられた。どこにいる。
ひゅっという風を切るような音が耳に届くと同時に綾子の視界は男を捕らえる。男がいた場所は綾子の後ろに位置するここより少し高いビルの屋上、そこで弓のような物を構えていた。
「あっ」
自分でもわかるほど間抜けな声、左胸に矢が突き刺さった。
「あっ、ん」
頭を冷静にして矢を慎重に抜く、霊力で編まれていたのか矢は跡形も無く消えた。幸い振り向いたおかげで核となるところとはずれていたのか身体は動く。もし気付かずにいたら確実に殺されていただろう。
矢を抜くと噴くように血が流れ出る。痛みも溢れるように感じる。
まったく、ここまで作らなくても。まぁ慣れてるけどね。
「まだ、生きていたか」
外套が風でなびく。
「……頑丈なんでね、はぁ……それより一つ聞きたい、何故そこまでの力がありながら七瀬伊織を殺したんだい？　あんたならその必要ないだろう」
息絶え絶えの声に男は憎らしげに口を開いた。
「紅葉に思い出させるためだ」
「思い出させる？　……ああ、そうかいあの事故を思い出させるためだったか」

「ここで死ね」
男は手を高く上げる。
「悪いけど、あんたにしか使えないわけじゃないよ」
「なにっ！」
白煙が二人を包むと同時にゴキッと何かが折れるような鈍い音が響く。
煙が晴れた頃には綾子は消え、男は咄嗟に防御した両腕は折られていた。

「と言うわけです。それと綾子の身体の核が少し削られて当分は戦えないでしょう」
「そうか」
あれから莢先生も地下に閉じこもり三時間ほど経って、綾子を除いた三人が居間に集まり、綾子の身に起こった事のあらまし。
「え～、質問。二ついいですか？」
頭の中を整理しつつ手を挙げる。
「何だ、七瀬」
「真中綾子って何者？」
今の話を聞く限り一般人じゃないよな、それに閻魔のおっちゃんは知ってるみたいだったし。あれ？　莢先生が驚いた顔をしてる。何か変な事いったかな？
「言ってなかったんですか？　閻魔様」
「い、言ってなかったかのう、秋山紅葉にひとりついていると」
え～と、確か１０部分目の３２～３３行目に言っていたような。
「でも、それが綾子だなんて聞いてない。莢先生だと思ってました」
「なるほど。まあ、いいでしょう」
閻魔のおっちゃんをひと睨みするとこちらに振り向く。
「真中綾子は処理係だ」

はい？　えっとそれは。
「真中綾子は一般人でなく、こちら側の存在だと」
二人は息を合わせたように頷く。
まぁ、さっきの話を聞く限り常人ではないと言うのは解る。
「なんで……」
それを言わなかったのか、とは聞く必要ないか忘れてたようだし。
それに予想はつく俺は囮だった
のだろう。敵が紅葉を狙おうとしても俺に近づけず右往左往している
るところを綾子が倒すと言うとこ
ろだろう。
「なんじゃ」
「何でもない」
ふぅと落ち着かせるように息を吐いてもう一つの質問に移る。
「俺が殺されたってどう言う事？」
俺は事故にあったのではなかったか。
『……』
どちらからも返答は無い。
俺なんかまずい事を聞いたのだろうか。
「ちょっと待て、七瀬」
「はぁ」
何か同じ展開になるような気がするようなしないような。
「言ってなかったんですか、貴方は」
「うっ、仕事で忙しかったし、それに現世での準備も大変じゃった
のだ」
「忙しいってそればかりじゃないですか」
う～ん、結婚して一年経った夫婦のセリフだ。というか、また忘
れられてたのか。
「七瀬、今、変な事考えなかったか？」
う、鋭い。さすが俺の担任。
「いいえ、何も」

「まぁいい、それよりもすまなかった。まさかこんな重要な事も言ってなかったとは」
さっきよりいっそうにきつい睨みをきかせる莢先生。
「わ、悪かった」
「謝るのはともかくどういうことなんですか？」
「現世ではスピードの出しすぎによる事故で七瀬伊織は死亡と言われている。が、こちらで幻覚を見せられた痕跡が運転手にあった。これは一般の人間が麻薬をやっているのと同じ状態に見えてしまうこれを行ったのは秋山紅葉を狙う妖怪の仕業だろう」
「でも、なんで？」
「恐らく、魔祓いであるおぬしが邪魔だったのだろう」
「それは違う」
おっちゃんの言葉を否定したのは俺でも莢先生でもなく息絶え絶えで立っている真中綾子だった。
「綾子、まだ出てきていい状態じゃない事ぐらい……」
莢先生の言葉を制止したのは太い腕だった。
「どういうことじゃ」
「……あいつは紅葉に思い出させるためだといった。その為に同じ状況にしたんだ。七瀬伊織を殺して。その意味をあんたならわかるだろう」
俺を、今にも死にそうな身体を支えて見つめる。
俺を殺したときと同じ状況。交通事故、庇って死んだ人間、護られた少女。
「なんで？」
それは幼い少女の涙。泣くしかなかった少女。なんであいつはそんな事をさせる。なんであれと同じものを背負わせる……いや、背負わせたのは俺も同じか。
それでも、許せない。何でそんな事をするのか、何が憎くてしたのか。

怒りに任せて立ち上がる。
「どこに行く気だい？」
「決まってるだろ、あいつを探して……」
パンッ
「？」
頬が熱くなるのがわかるまで何が起こったのかわからなかった。
「何するんだ！」
綾子は俺の頬をはたいた手を下ろしざまに胸倉を掴んできた。
「何するか？　ふざけんじゃないよ。あいつはあんたより数段強いんだ。しかも怪我を負っているあたしに叩かれるまで気付かないなんて、このままだとあんたはただ殺されるだけだよ」
「……」
何も言い返せない。処理係の一人である綾子は俺より遥かに強いはずだ。それなのにあいつは綾子に怪我を負わせて戦闘ができないほどにまで追いやった。なら、俺が勝てる道理などない。
「閻魔様。これから学校が終わってからこいつは、私が預かります」
『は？』
俺の肩に手を乗せてそんなことを言った。
「どういうことじゃ、綾子」
「どうもこうも、私があんたを鍛える。奴が出てくるとしたら早くとも一週間後。それまでに私があいつに届くぐらいには鍛えてみせる」
「なんで一週間後なんて言えるんだ？」
「私とてただでやられた訳じゃないよ。あいつにも怪我を負わせている。治るとしたら早くても一週間かかる。ま、私はそれ以上かかるけどね」
「仕方あるまい、では律を頼む」
「ありがとうございます」

頭を下げたかと思うとぐいと襟首を引っ張って俺を壁に投げつける。当然のように壁には黒い穴が
穿たれていた。
壁を通り抜けると見慣れた暗い空間。
「しかし、俺の意見は聞く気は無いのか」
「ないよ、それに時間も無い」
そうきっぱりと言われるとな。
「はい、ぶちぶち言わない。とっとと始めるよ」
「始めるにしても何を？」
この前までの修行の延長みたいなものというのはわかる。
「そうだね。まず、ここから……」
綾子は指差すところに何か白い物を置いて、そこから五十メートル程先に同じ白い物を置く。
「よし、んじゃま。ここまで一度来い」
五十メートル先にいる綾子は大声でそう言った。
あんな大きな声を出して平気なのか？
「あ、ちょっと待った。普通に来るんじゃないぞ。霊力を使って全力で来い」
「？」
とりあえず言う通りに脚に霊力をこめてスタート地点に着く。
呼吸を整える。綾子の手が上がり少し止まって下がる。スタートの合図。
世界は高速に巻き込まれる。もっとも黒一色だから変化はないが。
「ふぅ」
五十メートルを三秒とかからずに走破する。
「どうよ」
自信満々で言ってみる。
「遅い」
自信は一言で崩れ落ちる。
「やっぱり、教わってないか。まぁいい、それを教えるためにやる

んだから」
よくわからないことを呟いく綾子。
「遅いってどういうことだよ。それなりに自信はあったんだが」
「ん？　ああ、それはこっちの説明不足だから気にしないでいい」
「説明不足？」
「今からするさ。まず、これからやるべき事は瞬脚って言う歩法だ」
「しゅんきゃく？」
なんだか某死神漫画のような……。
「はい、それ以上何も思わない。じゃあ、説明するよ瞬脚ってのは……瞬間移動なみたいなものだね。実際はもう少し遅いけど。
さてこの瞬脚、やり方は簡単。でも実行するのは難しいんだよ」
「簡単で難しい？」
「見てみればわかる。いいかい、霊力を使うのは二度だけでいい」
そう言って構えると綾子は消え、五十メートル先に現れた。
今のが瞬脚。正確には解らないけど綾子の言葉、霊力を使うのは二度。言うとおり綾子は最初と着地時のみに使用していた。
走っていたわけじゃないし、どちらかというと跳んでいると言うのがしっくりくる。
「わかったかい？」
瞬脚を使わずに歩いてくる綾子の顔はいつもより白く、よくみれば足取りもおぼつかない。
「大丈夫か？」
「え、ああ、大丈夫だよ。あたしはこれ以上動かないから」
言葉通り座る。が。
「あぐらはよした方がいいと思うぞ」
「なんで？」
当たり前の事を心底不思議そうに聞いてくる。
「女の子だろ、お前」

「……」
何故か呆けた顔をしている。何か変な事いったか俺？
「くっ、あはははは。なるほど、紅葉が惚れるのもわかる」
「何？」
今、ものすごいこと言われたような。
「何でもないよ、正座すればいいんだろ」
あぐらから正座に変わる。最初はあぐらを組もうとしていたわりに正座もきっちりと座れるとは。
「どうしたんだい？　さっさとやる」
「やるといわれても、やり方がわからん」
「ああ、そういえばまだ言ってなかったか。と言っても見た通りだ。最初と最後に霊力を使うってのはわかったかい？」
頷き答える。
「それだけ解れば十分。始めの一歩で脚に込めた霊力を使い切る。この間は跳ぶと認識した方がいいこの間、注意すべきは距離に応じて込め方を変えると言う事。多い分には何とかなるけど少なすぎると届かなくなるからね。で、次は着地をする前に最初以上の霊力を脚へ込める。何故そんな事をするのかというと、用はブレーキの役割だね。スピードを出しすぎた車がブレーキを掛けるのと同じ。進む力が強いにも関わらず生身の脚で着地したらずっこけるからね」
わかった？　と続ける綾子に頷いて返した。
「じゃ、あたしは見てるからやってみて」
「わかった」
とりあえず、言われた通りにする。走る時の要領で霊力を込め構える。落ち着かせるように一呼吸してから一気に放つ。
世界が一瞬消えたように感じた。
「いっつ〜！」

盛大に転んだ。霊力が間に合わず脚を着いた途端前のめりにすっ転んだ。しかも足の骨が軋んでかなり痛い。

「着地の準備は跳ぶと同時にする。飛んでいる間じゃ間に合わない。それと最初の霊力それだと足りないよ」

「えっ？」

言われてから気付いた。スタートからゴールまでの半分にもいってない事を。

「走る時と同じなんて考えるな。今のあんたじゃ考えてもわかんないんだから、精一杯霊力を込めて身体で覚えろ」

「むっ」

それもそうか、初めてなわけだし考えてやっても仕方ないか。

かくして綾子による地獄のような特訓は始まった。

≪続く≫

変わり果てた思い

日はとおに沈み弧を描く月のみが世界を照らす。
その灯りを頼りに男は折れた両腕を睨む。

まったく私とした事が油断をしたものだ。相手が手強いことなど認識していたはずだ。
「はぁ……」
吐く息は白い。それほどまでに今夜は冷える。
過ぎた事を言っても仕方がない。今はこの腕が治るのを待つのみ。この程度のものならば一週間あれば直ぐだ。それにこんなものは幾度も経験したのだ。……はて？　何のためにそんなにも傷ついてきたのか。
欠片が足らず、成り立たないジグソーパズルの如く記憶から抜け落ちている。が、そんな些末事を気にしてもしょうがない。
私にはやるべき事があるのだから。それは
――――――秋山紅葉を殺す事――――――
今の私にそれ以外の感情は憎しみしか見当たらない、故に私の邪魔をするアレも殺す。
アレに最早守りなどない。妖怪の処理係はもう使えないのだから。確実に身体の核を削ったのだ直るにも時間はかかる、そしてアレよりも弱い。霊力も微弱にしか感じないのが何よりの証拠。
ならば速やかに済まそう。主賓ではないのだから。
男は憎悪のこもった眼で空に没する月を眺める。

憎しみは大切なことさえも忘れさせてしまうのか、彼が些末事と扱かった思い出すべき欠片。その大切さに彼は気付かない。
ジグソーパズルは揃わなければ全てを見ることができないというのに……。

変わらぬ思い

「大丈夫ですか？　律」
朝のＨＲが終わり、授業までの僅かに空いた時間で賑わう教室で紅葉の開口一番がそれだった。
「疲れて見える？」
「はい、目の下にくまがばっちりと残ってます」
やっぱりか。流石に人間一時間しか寝てないとそうなるよな。さっきから身体の節々が痛いし、これは修行も原因の一つだが。因みにその要因の一人である奴は遅れてくるとの事である。
「どうかしたんですか？」
「寝不足だよ」
「寝不足ですか。何かしていたんですか？」
「ん～、今やっている事にたいして理由を思い出していたと言うか」
我ながらおかしな発言だと思う。やっている事に明確な理由を持っていなかったのである。が、紅葉は俺の言葉に何も思わないのか、はぁと頷く。まぁ、思われたらそれこそ面倒だ。
「という訳で私は授業中寝てるから」
机に突っ伏して早々に寝にはいる。
「……」
紅葉からの返事はなかったのは別に気にはならなかったが、最後に目に入った紅葉の顔が少し気になった。結局、寝たけど。

～三時間前～

「か、身体が動かん」
指一つ動かそうとすると骨が軋んで痛い。
「うん、そりゃそうだ。霊力の使いすぎだよ」
なんて、笑いながらそんな事を言ってきやがる綾子。

「使いすぎ？」
「そ、体力と同じだね。ありったけ使ったら動けなくなるだろ。霊力も同様だよ、生命力だから余計に動けなくなる。だから今日はもう終わるよ」
そういうものか。でも……。
「ちょっ！　律！？」
綾子の慌てる声を無視して軋む身体に力を入れ無理矢理立たせる。
「がっ……！」
直立するだけで全身に痛みが充満し頭痛が駆け巡る。視界が定まらずふらつく。
「まったく、何やってるんだアンタは。身体を休めないと」
視界が定まったのは綾子に支えられてからだった。どうやら、普通に立っている事すらままならないようだ。けど……。
「駄目だ。それじゃあ、あいつを護れない」
そう、このままじゃ俺はあいつを護る事なんてできない。
「っあ！」
がきんと金槌か何かに叩かれたような痛みが身体を蝕む。もうだめだと肉体の限界が訴えてくる。それでも。
「はぁ」
わざとらしいため息が聞こえたかと思うと、視界がぐるんと回転する。気づくと俺はうつぶせの状態で綾子に組み伏されていた。
「な……つっ！」
がきっときっちりと関節を極めてきやがった。
「まったく、こんな状態で何しても意味無いよ。とりあえず今は休む事」
「でも……」
「でももなにもない、いいかい？　別にあんたがここで身体を壊したりするのは構わない。けど、そしたら誰が紅葉を守るんだ」
「あっ」
言われて気づいた、そうだ今の綾子は無茶が利くような身体じゃ

ない。それで俺が今のような状態になったら、それこそどうしようもない。
「わかったかい？」
「ああ、悪かった」
ただその言葉に頷くだけだった。綾子の言い分は正しいのだから。
「よし、じゃあ帰ろうか」
満足のいく答えを聞いたからか俺の身体を解放してくれた。してくれたけど。
「どうしたんだい？」
まったく動かない俺を気にしてか、こちらを気にしてか不思議そうに首を傾げる。
さっきのを見ていたら解るのではなかろうか？
「……ああ、そうか動けないのか」
思考すること十秒ほどで考えに辿り着いてくれたらしい。
「ま、ちょっと聞きたいこともあるし、ここで少し休もうか」
そう言ってうつ伏せになって動けない俺に手を貸してくれたおかげでどうにか座ることができた。
「聞きたいこと？」
「うん。七瀬伊織にとって秋山紅葉はどういう存在なんだい？」
それを、こいつは知っているのではないのか。
「あ、ちなみにただの幼馴染みとか言うのはなし。というか言ったらぶっ飛ばすからね」
……それ以外にどう言えば良いんだろうか？
「……」
沈黙は長く続く。どういった存在か、紅葉がどういう存在。俺にとって。
沈黙を先に破ったのは綾子だった。綾子は頭を掻きながら質問を変えた。
「質問が悪かったか。じゃあ、どうしてそこまで紅葉を護ろうとするんだい？」

どうしてか……それは。
「約束したから」
「約束？」
七瀬伊織がした十年以上前の約束。

父親が死んだのを自分の所為だと公園で泣きつづけている少女がいた。
俺はその少女の姿を見ているのが嫌だった。少女の父親とは面識はなかったけど少女が泣きつづけていたら父親は報われない、それに少女の泣き顔を見ているのがどうしようもなく悔しかった。だから、この少女がもう泣くことがないように。
『俺が君を護るだから泣かないで』

「って、言ったの？」
綾子の言葉に頷く。そう七瀬伊織は護ると誓ったのだ。あの日から紅葉を悲しませることがないようにと。ああ、そうだ、それが理由だ。あいつが悲しまないように、あいつがいつも笑ってられるように。
「だから、俺は紅葉を護る」
今まで失念していた紅葉を護るという理由を。
「くっ……」
突然、綾子が腹を抱えて蹲った。
「き、傷が痛むのか、おい」
「あっはははははははは」
なんて、目に涙を浮かべて笑い転げる綾子。
「え？」
「いやぁ、青い、青いねぇ。まぁ今はそれも華って言うのかもね」
ひー、ひー言うのを堪えて息を整え、俺の頭に手をぽんと乗せた。

「なっ……！」
「約束した事だ。ちゃんと護りなよ」
最早、綾子の顔は笑っておらずその目は真剣だった。
馬鹿にされたのかと思った。でも違ったこいつはそれが何よりも大事な事だと教えてくれているんだ。
「わかってるよ」
「ならよし、じゃあ帰るよ」
そういって暗い空間から抜け出した時には日が顔を見せていた。

がっしゃん。
机が転げたようなそんな音が教室中に響く。
「んあ？」
身体の右側面がひんやりと冷たい感触が染み込む、それに加わりなんか痛い。
「まったく、いつまで寝ているんだい」
聞き慣れた声が耳に届く。というか、この状態は何なんだろうか？　多分、机ごと倒されたのではなかろうか、だって目の前に机が横たわっているしで今の声からしてあいつが犯人なんだなぁって予測できるし。
「綾子、何す……どうしたんだ？　その腕」
怒鳴ろうと思ったが目の前にいる人物の格好が今朝と一箇所違っていた。目の前にいたのは真中綾子、本人なのだが昨日とは格好が違う。首に三角巾を通してギプスをつけた右腕を吊っていた。
「階段から落っこちちゃって、その時ね」
「私も驚きましたよ」
紅葉が会話に入ってくる。綾子に気づかれないように出す元気な声とは裏腹に心配しているのが丸わかりの表情をしている。
「心配するもんじゃないから、大げさなんだよみんな。ところで、いいのかい？　昼ごはん食べないで」

「あっ！」
「へ？」
あれ？　時計はすでに昼休みの始まりを示していた。全然気づかなかったぞ。
紅葉は鞄から弁当箱を取り出している間に綾子の腕について聞いた。
「ああ、これ？　なんともないよ」
なんて、平然と周りには聞こえない声で言った。
「じゃあ、なんで」
「今、歩くだけでも結構つらいんだ。当然体育も。で、それを休むために骨折したって事にしたのこうやってれば無理は言われないからね」
「たしかに」
昨日の今日だ。それに莢先生からかなりの怪我だったときいた。
「今日、遅れて来るってのはその為か」
「そういうこと」
満足いった笑顔で頷くと丁度紅葉がお待たせしましたと言って弁当箱を持ってきたので机を合わせた。

「律、これから何処にいきますか？」
昼食も終え、紅葉はそんなことを聞いてきた。
「どこってどこ？」
「や、約束したじゃないですか、校内の案内するって」
むー、と頬を膨らます紅葉はかなり可愛かったりする。
「ああ、そうだった。ごめん、ごめん」
「ごめん、あたしはパスするよ。この腕で歩きっぱなしってのはきついからね」
包帯が巻かれた腕を見せる。
「え、でも」

「いいって、お二人で楽しんできなさい」
なんて、目を細めて笑った。
「ん、わかったよ。じゃ、紅葉行こう」
紅葉の手を引いて教室を出る。人の親切を無碍にする訳にもいかないしね。

「寒い」
音楽室や美術室、体育館などを一通り案内され、そろそろ昼休みも終わるということで自分の教室へ戻る最中の廊下がすっごい寒かった。
「律は冬が苦手ですか？」
なんて嬉しそうに笑いながら聞いてくる。
「う～ん、というか寒いのが苦手なだけ。冬自体は嫌いじゃないかな」
俺の答えにうんうんと頷く紅葉。
それに冬にしか無いものもあるしなぁ。
「そういう紅葉は？」
「私は好きですよ」
「へぇ、どうして？」
「それはですね。冬は準備の季節ですから」
「準備？」
初めて聞く言葉だ。春は出会いの季節とか言うけど冬をそうやって言う人はそうはいないだろう。
「そうです。春は始まりの季節とかいうじゃないですか。だから冬はそのための準備する季節だと思うんですよ。私は始めるときも楽しいんですけどその準備をするのも好きなんです」
はにかんだ笑顔を見せる。なるほど、ということは紅葉は今、何か準備をしているのだろうか。聞いてみると。
「してますよ。これから桜が咲きますから今年はどこでお花見をし

ようか、何をつくろうかとか」
かなり的を外したようなことを言う。当の本人は間違いとは思ってないように見える。
「そうだ、律も来ませんか？」
「何に？」
「お花見ですよ」
紅葉にとっては何でもない一言でもそれは。
「えっ――――」
俺を凍らすような言葉だった。絶対にできない約束、俺があとここにいられるのは三週間もないのだ。そんな約束はできない。しかし、紅葉はそんなことを知らないのだ。
「だめですか？」
紅葉の悲しそうな顔を見ていることなどできなかった。だから、俺はできもしない約束をした。

放課後、俺は板張りされた床に座っていた。三方には壁があり俺の正面に壁がなく吹き抜けになっている。そこの縁に弓道着を身に着けて並んでいた。
ここは学校にある弓道場の中である。初めは紅葉に誘われて、綾子もそれに賛同して今に至る。因みに隣には綾子が制服のまま正座している。本人いわく着替えにくいからだそうだ。来なければいいのにと言ったところ部長だからそうもいかないとのこと。大変なんだな部長って。
「紅葉の番だよ」
胸当てを付け縁に立って弓を構える紅葉。
これから行うのは２７ｍ先にある的を射る、射と言われるもの。今、綾子に聞いたんだけど。
弓道には射法八節と呼ばれる弓の引き方がある。
始まりは足踏み、胴造りで体構えを形成。次に弓構え、打起しを

経て引き分けまでで射構えの動作に入る。そこから会に至り離れで矢が離れる。
ストン。
的を射る音が弓道場に響き渡る。そして残心、結果を受け入れる心構えであり弓道では完成された無我の境地。その姿に。
「やっぱり、うまいねぇ」
「……」
隣にいるはずの綾子の感嘆が聞こえないほどに見惚れていた。俺はその姿を見て紅葉に抱く気持ちを今、知った。

発案

暗い世界、もう見慣れた日常。
「はっ……ふっ」
スタート地点から五十メートル離れたところに着地する。
「よっしゃ」
何度目かの実感、拳を握って確かなものにする。
「どうだ、俺だってやればできんだよ」
「ま、仕方ないか。四日でこれだけできれば上出来かな」
「うむ、拙すぎるが時間がないのも事実」
ため息をもらす綾子に同調する零式。
「……」
心に傷がついたらどうしてくれるのだろうか。自信満々だったのにそういう反応は割かしきついのだが。
「そうだね、じゃあ第二段階といきますか」
「はっ？」
今何つったこの人は。第二段階ってなに？
「綾子、こやつに説明をしていなかったのか」
う～ん、と頭を掻いて、悪い忘れてた。なんてここ最近あった事と似たような事を言われた。
「次は限りなく実戦に近づけるよ。精神的にも肉体的にも今までより遥かに消耗するから覚悟するように」
綾子の目が真剣だったからかごくりと喉が鳴る。
実戦。それは俺、八ノ瀬　律の最終地点である。俺はそれが終われば消える。紅葉を狙うあいつを倒してしまえば俺に残る意味がないのだから。
きゅるりと腹が鳴る。うっ、そういえばかなりお腹が空いている。シリアスに決められない自分を恥かしくも感じるが人間、食欲には勝てないものなのだ。と断言することにしよう。

「まぁ、でもその前にこれから夕飯だから休憩しよう」
苦笑を浮かべながら綾子は何も無い空間に手を合わせる。
「悪い」
黒い世界に色彩ある穴が穿たれる。そこに足を踏み入れると元の世界へ戻る。
「律、先にシャワー浴びてきた方がいいよ」
綾子の言うとおりさっきまで汗だくだったので自分がくさいのがわかる。とっとと入ろう。
「はいよ」
着替えとタオルを用意して風呂場に突入する。
身体と頭を洗ってから湯船に入る。
「はぁ……」
お湯の温かさが今までの緊張を緩ませるからか、淡い希望を描かせる。
言ってしまえば俺はずっと八ノ瀬　律として在りたい。けど、それは在ってはけないこと。まぁ、でもこの状況になれた事を感謝しよう。紅葉を護れるのだから。俺に魔祓いがなかったらこんな事にならなかったんだから……ってあれ？
今回のことが終わって俺がいなくなったら、紅葉はどうなるんだ。魔祓いである俺が消えたら紅葉を狙う妖怪が出てきてしまうのではないか。俺が来るまでは偶々、紅葉は狙われなかっただけだ。それが今後もあるとは限らない。魔祓いがなければ紅葉は危険すぎる……待て、魔祓いが無ければ紅葉は危険。なら俺がいなくても魔祓いがあれば……！
ざばっと湯船から飛び出す。急いで代えの服に着替え、居間まで走り抜く。
「おっちゃん！！」
居間では閻魔のおっちゃんと莢先生と綾子がいた。零式は多分、綾子が俺の部屋に置いてくれたのだろう。

「なんじゃ、そんなに慌てて」
身体を湿らしたままの姿を見て呆れたような顔をするおっちゃん。慌てて来たからこうなったわけだが、そんなこと気にしない。それよりも大事なことがある。
「おっちゃん、俺を紅葉に移すことできないか？」
『はっ？』
全員の頭に、はてなマークが見えた気がした。

「なるほど、つまり七瀬伊織の魔祓いとしての性質だけを抜き取り、それを秋山紅葉の魂に移すと。そう言いたいのじゃな」
俺の言葉を要約して説明してくれたおっちゃんに頷き答える。
「できないか？」
「無理じゃ」
そうきっぱりと躊躇いなどなく言い放った。ただのできないという言葉。ただそれだけの……それだけの言葉で頭が真っ白になった。
じゃあ、紅葉はずっと妖怪に狙われ続けるっていうのか。
「な……んで？」
零れ落ちた言葉はそれだけだった。
「魂には容量がある。肉体というな。おぬしが言うのは水を並々に入れたコップにさらに水を入れるという行為に他ならん。魔祓いという性質を手に入れても秋山紅葉の人格が零れ落ちてしまう」
「そん……な、なら紅葉はどうなるんだよ。ずっと命の危険に晒されるっていうのか」
闇魔のおっちゃんはあごを押さえて目を瞑る。
「――いや、もしかしたら何とかなるかもしれん」
おっちゃんのその一言が救いのように聞こえた。

夕飯を終えた後この家にある地下室へとおっちゃんと入っていく。

初めて入った場所には何もなかった。地面には円い魔法陣のようなものが彫られているのはちと気になったけど。
「ここで何する気？」
闇魔のおっちゃんはごそごそと何かを取り出した。
「ネックレス？」
おっちゃんの手には少し暗い琥珀色の宝石をつけたネックレスのようなものがあった。
「元来、宝石というのは霊力といったものと相性がいいのだ」
「はぁ、だから……」
何の躊躇いもなくおっちゃんは俺の胸に腕を突き刺した。
「え？」
なんというか細い注射針で刺されたような痛みに冷や汗がでる。
「む？　こうなっているのか。ならここら辺か」
ぶつくさとおっちゃんが何か呟いているがこんな状況で耳を傾けることなんてできやしない。
「――っ――はっ」
「すこし、黙れ」
無茶を言うなと声を出したいが震えてうまく口が動かない。
「ふむ、これか」
ズッと腕を引き抜くとおっちゃんの手には小さな青白い光が灯っていた。それを琥珀に俺の時と同じ要領で突き入れると輝きを見せた。
「よし、これでよかろう」
そう言って俺の首に琥珀のネックレスを付ける。
おっちゃんが何をしていたのかは解らないが胸から腕が抜けたという事実に脱力し腰を下ろした。
「何しとるんじゃ？」
訝しげにこちらを見る闇魔のおっちゃん。どうも俺が座っている事が不思議に感じられるらしい。
だが、こちとらんなことを冷静に見ているおっちゃんが不思議で怒

り心頭である。
「お、おどれのせいじゃぁぁぁぁ！」
「な、なぜに広島弁風！？」
そこが驚くポイントなのか？　このおっさんにはそれがデフォルトされているのか？
「なんの説明をされずに身体に腕を突っ込まれたら誰でも腰を抜かすだろうが」
「ふむ、しかし説明したらしたで嫌がるじゃろう。身体に腕を突っ込まれると言われたら」
「うっ……」
そう言われると反論はできる自信はないなぁ。
「というか、何したんだ。これに」
首にぶら下がっている。輝きが消えない琥珀に触れる。
「何って、おぬしが望んだことじゃろ？　その中に魔祓いを移した。アレを倒したら秋山紅葉に渡すがいい」
「本当に？」
「この状況で嘘吐くほど無粋ではない」
おっちゃんの声に嘘はないし、今まで嘘は言ってない気がするし。というかこういった状況でなければ嘘を吐くのだろうかこのおっさんは。
「ありがとな、おっちゃん」
礼は一応言っておこう。
「……何か奇妙な思念つきで礼を言われてもな。まぁ、よかろう」
おっちゃんに戻るよう促され、階段を上がると修行を続けるために綾子たちのところへ行こうとしたらおっちゃんがぽつりと口を開いた。
「今回の件が終わったら、お主に給料をやろう」
「給料？　なんだそれ」
「それはまだ秘密じゃ」
そういうと同時に穴は閉じられた。

「なんだったんだ？　いったい」
死後の世界にも金って言うのは必要なのだろうか？
「お、やっと来たね」
などと考えていると後ろから綾子の声が掛かる。
「なにそれ？」
背後にいた綾子の格好はさっきとは違っていた。大きくは変わらないが右腕のギプスをせずにその右手には弦の張られていない弓のようなものを持っていた。ついでに左手には零式を握っていた。
「これ？　これは霊弓と呼ばれるものだよ。ま、弓だねわかりやすく言うと」
「矢どころか弦もないようにも見えるんだけど」
弓というには足りなさ過ぎる気がする。あれでは何もできないのではないだろうか。
「ん？　それは霊力で作れるよ。正確にはこれに霊力を送ると自動的に作られるんだけどね」
あとは弓を引く要領と同じだよと続ける。
「論より証拠、百聞は一見にしかずだ。これから、修行を始めようか」
その前にこれと渡されたのは零式だった。
「じゃ、とっとと説明しますか」
綾子の説明はここから三十メートル先にあるところから俺を狙って撃つとのこと。まずはそれを避ければいいらしい。
「でも何故に弓なんだ？」
人の話を聞いていたのか？　とため息まじりにじろりとこっちを見てくる。
「あたしが戦闘に参加できない原因はなんだったか覚えているかい？」
それは、確か身体を射られたか……ら。

「ああ、そうか」
「思い出したかい。そう奴さんは弓を使う。でもって律は近距離でしか闘えないし。距離を取られたらそれで終わり。だからそのハンデをなくす為の修行だよ」
「それが避けること？」
「そう、まずは避けることだ」
まず？
「あたしの調子は完全じゃないから、三十メートル程度でしか撃てない。本来の相手なら五十からでも撃てるだろうね」
悔しそうに言う綾子。というか調子が万全ならどれぐらいの距離からできるんだろうか。
「さて、質問はないね。なら時間もないし早々にはじめようか。と、その前にひとつ注意。あたしは本気であんたを射る。油断はしないように」
俺から三十メートル離れたところへ一瞬で移動する。弓を構える綾子にもはや隙はない。殺気で空気が凍りつく。それに反応して構える。ここからは修行ではなく実戦。気を緩ませば否応なしに俺は死ぬ。
「さぁ、始めようか」
綾子の声が昏い闇に響き渡る。

気のせいなのでしょうか。律を見ていると伊織を思い出してしまいます。
何故なのでしょうか。律が伊織に似ていると思えてしまうのでしょうか。
何故、伊織と重ねてしまいそうになるのでしょうか。
何故、律を見ていると泣きそうになるのでしょうか。

でも、泣けません。

それがあの時に誓ったこと。もう一度破ってしまった。だから私は破らない。

夜に輝く月に少女は誓う。

決戦

あれから綾子の修行を経て三日。いつもの帰り道、今日は三人で俺の家に来ることになっていた。

「綾子、怪我のほうはどうですか」

綾子が言っていた一週間が経った。

「まぁ、もう少しで包帯も取れるよ」

包帯が巻かれた腕を見せる。

以前修行の第二段階に変わるとき邪魔だからという理由でギプスを外し包帯を巻くことにした。実際、何でもなかったので問題はないのだが三日でギプスを外すのはおかしいと思う。けれど誰も突っ込むことがなかったので気にしないようにしておこう。

「どうしたんですか？　律」

紅葉が俺の顔をのぞくよう見る。考え事をしていたせいか顔を俯かせていた。

「ん、なんでもないよ」

そうですかと安心したように笑顔を見せる紅葉。それを見るだけでますます解らなくなる。

何故、この笑顔を奪おうとするのか。俺は理解できない。だって命を失ってまで護ったものなのに……。

紅葉を狙う妖怪は最初から聞いて知っていた。的を絞るのは簡単だったのだ。俺に出会うまで紅葉は狙われる事がなかった。俺に会ってからは紅葉に狙われる理由はなくなった。にも関わらず紅葉は狙われている。

矛盾に感じられるが、こう考えればいい。紅葉を狙う敵は元々は妖怪じゃなかったのだ。

本来、霊能力のない人間には人の内にある魂が見えることはない。が、肉体を失った魂なら見える可能性が出てくる。他の人間の魂ならまだしも紅葉の魂を霊体なら誰にでも見えてしまうそうだ。

黒いカーテンのようにふわりと広がり道を塞ぐように舞い降りてきた。

つまり、肉体を失うときに紅葉の近くにいたのだ。

「やぁ、久しぶりだね」

黒い外套を着た長身の男が一人。髪の手入れなど一切していないのか無造作に伸びた前髪が顔に垂れ下がる。が、両目だけは隠すことなく紅葉を憎悪のこもった眼で、嘲笑うように口を歪めて。

「紅葉」

本当に久しぶりと言うように紅葉の名前を呼んだ。

「お、父さん？」

絞り出した紅葉の声が震えている。

そう、紅葉の前で肉体を失い死んだ男がいた。名前は秋山一弥、紅葉の父親。

理由は知らない。命を懸けてまで護ったものを狙う理由なんて知らない。

綾子が震える紅葉を背中で庇い、綾子の前に俺が出る。

「なんだ、あんた」

鞄にある零式を取り出し構える。と、目の前にいる男は手を挙げ首を振る。

「いや、今は戦う気はないよ。少なくともこの場ではね」

「そんな事が信じられるか」

「ここは私の土俵ではないし、まぁこのままやっても私が勝つと思うけどね」

絶対に揺るがない自信を口にすると漏れ出る殺気が世界を凝結させた。

その殺気に紅葉のうめき声が零れでる。
「じゃ――あ、何のようだ」
ただ抵抗するように凍りついた身体から出た言葉はそれだった。
その言葉に黒い男は口を開く。

――今宵アノ公園デ君ヲ待ツ――

その一言を残して男は消えた。
俺の後ろでどさりと何かが落ちるような音がした。
「紅葉！？」
慌てて振り返ると紅葉がしりもちをついていた。
「大丈夫だよ、ただ殺気に中てられて気絶しちまったんだ」
よく見ると紅葉の額には玉の汗が浮かんでいて身体は震えていた。
よいしょとの掛け声とともには紅葉の身体を抱き上げ、そのまま歩を進める綾子に零式を鞄に入れて後を追った。　途中紅葉を背負おうかと言ったら、大丈夫と言われ綾子が紅葉を抱いたまま家の前に差し掛かったところ。
「じゃあ、あたしはこのまま紅葉の家に行くから」
「あ、私も……」
「だめだよ、あんたはこれから何をするべきかわかってるんじゃないのかい？　無駄な体力は使わないことだよ」
しっかりと俺の目を見据える。
「――わかった。でも、これを紅葉に」
首に掛けていたネックレスを外し紅葉に付ける。
「ちょっ、あんた……」
「大丈夫だよ。もしあいつが紅葉の家に来たら対処できないだろ」
そう、いくら綾子でも身体は完全ではないのだ。そんな状態であいつに来られたら勝てはしないだろう。魔祓いがこっちにあれば近寄ることはないだろうし。
それに俺はアレと対峙して勝てる気がしなかった。だから今のう

ちに渡しておく。ってのは口が裂けても言えないけどな。
「わかったよ。伊織、気をつけろよ」
「……ああ」

「はぁ」
外に出ると辺りは静寂に包まれていた。今はもう深夜と言える時間なのだから静かなのは当たり前か。遊具が滑り台ぐらいしかないが野球はできなくない広さの公園、この時間帯に人がいるはずはないのだ。
今夜の月は綺麗なんだけど、コートを着ててもかなり寒い。風が吹いていないのが幸いと言えば幸いかな。
（当たり前だ馬鹿者、あのまま直ぐにこの公園に来るとは）
零式の声が呆れているのがわかる。
零式の言うとおり俺はあの後、家に着いて鞄を放り投げてここに来たのだ。おっちゃんたちは家にいなかったので何も知らない。
（そもそも、この公園であっているのか？）
「あー、多分ここ。今、あいつが来なくて自信喪失しかけてる」
ここは俺に出会うまで紅葉が泣き続けていた場所。あいつもそれを知っているのだろう。
（……貴様にひとつ問うべきことがある）
「なに？」
（七瀬伊織が秋山紅葉を護る理由を覚えているか？）
「はっ？」
俺が紅葉を護る理由？　そんなの覚えてるにきまってる。あいつの泣いている顔を見ていたくないから、あいつに笑っていて欲しいと思ったから。
（ふん、やはり忘れているか）
「どういう……！」
キシリと世界が凍りつき蒼く淡い光が暗き外套を照らす。

来たか。
距離はおよそ十メートル。霊弓を持つ奴にとってこの距離は射程範囲にすぎない。
「さてこの世に未練はないか？　ここで潰えてしまうんだ。いまのうちに断ち切っといた方がいい」
風の音が聞こえるほどの空間に声が響く。アキヤマの放つどうしようもないほどの威圧感に押しつぶされそうになる。
「ああ、まったくだ」
それに俺は、
「あんたを倒してここで断ち切るとしよう」
ただ笑って答えた。
「そうか」
嘲笑うような声を残してアキヤマは消えた。
ここに戦闘は開始される。優勢は明らかに向こう。こちらがやられるのみ。
「？」
故に俺は動かない。

「律、あんたは決して動くな」
「はっ？」
いつもの暗い修行場でアキヤマに対しての戦闘の仕方を助言してもらおうと聞いた一言がそれだった。
「動くなって……それは」
死ねと言ってるんだろうが、この目の前にいる御人は。
「勘違いはしないように。あっちに動かれたら今のあんたじゃ追いつけないよ。あの程度の瞬脚じゃ無理だよ」
「うっ！」
そんなに俺の使う瞬脚はだめなのかな？
「聞くまでもないであろう、あれで戦おうというのだからな」

「うるさい、人の心の疑問を読むの禁止ぃー！」
「話を聞けっての。いいかい大事なのはこれからだ。追いかけなくていいでも絶対に目を離すな。その間に力を溜めろ、ただ一瞬の為に」

「と、言われても」
向こうが早すぎて影しか見えない。
（決して奴から離すな。今の貴様を見て彼奴は油断している。そこが勝機だ）
零式の言葉に従いただ力を溜めて目だけで追いかけ続ける。
「なんだ、吼えていた割には、もう諦めたのか」
心底嬉しそうな声を上げて足が止まる。
早まるな、悟られるな。身体の方向は合わせても構えはしない。
追いかけるのは視線のみ、零式を握る手に力を込める。距離は三十メートル。

ギシっと弓が反る音が響き青白い鏃が標的を狙う。

『弓で攻撃されて避けきれなければそこで勝ち目はゼロ』

弓がさらに反っていく。

『でも、避けきれれば、たった一瞬だけの勝機が見える』

ドクンと心臓が鐘を鳴らす。瞬間、矢が解き放たれる。その一撃は八ノ瀬　律を絶命させるに十分なもの――

「――！」

ほぼ同時にアキヤマの矢とは逆に、足に溜めていた全霊力を用いて奴の懐へ飛び込む。

この瞬間こそが七瀬伊織にとって最大の勝機。

いかな絶対必中の腕をもってしても手から離れた以上その軌道を修正するのは不可能。

全力で、一撃で終わらせるために、

ヒュンと風を切る音が頬を裂き通り過ぎていく。

絶えて放さずに零式を握る手を緩めずに、

首を狙う、必殺の――

「な……に？」

零式を振るった先にアキヤマはいない。

「後ろだ！」

零式の怒号に反応するも時すでに遅し。放たれた矢は心臓の目前へ――。

「！」

ズチュと身体を突き刺す音が耳についた。

決意

同時刻

「本当に行くのかい？」

目の前にいる真実を伝えられた少女の身体は未だに震えている。

無理もない。死んだはずの父が自分を殺そうとしているなんて、そんなことに立ち向かえる人間なんてそうはいないだろう。

「行きます。律が、伊織が、お父さんがいるんです」

少女の目にははっきりとした意志が宿っている。

この娘は強いんだね。あんたの影響かね。

「わかった。じゃあ行こう」

沈黙に支配されて空間に一歩踏み出す。と、見慣れた誰かが立っていた。

「何してるんだ二人とも」

「莢先生？」

「なんだ、莢か」

白衣を着た白河　莢がタバコを口にして苛立たしげに頭を掻いた。

「なんだじゃないだろう、綾子。秋山を連れ出すなんてどういう気だ」

莢の声には明らかに怒気が含まれている。それは秋山紅葉を巻き込む事に怒っているのか。

「紅葉の意思だよ。あたしはそれに従ったまでだ」

「それがいけない。どれだけ危険か解っているのか、秋山」

睨むように見る莢の視線にびくりと紅葉の身体がおびえたように反応する。

「わかりません」

それでも、見返すようにはっきりと自分の意思を告げる。

「私は今でも綾子の話を信じきれていないです。でも……律が、伊織が私なんかの為に戦っているんです。それにお父さんだって……」
声に嗚咽が混じり始めるがこの少女は決して泣くことはない。
「莢」
はぁと深いため息を吐くと。
「わかった。ただし私もついて行く」
「ほ、本当ですか？」
「まぁ、嘘は言わんさ」
「じゃ、行こうか」
三人は肩を並べ紛れもない死地へと足を運ぶ。

ぶん殴る

「あ……ハァ、ハァ」
左手から血が溢れ出す。
「ふむ、中々にしぶとい」
全身は真っ赤に染め上げられている。
それを見て闇夜よりさらに昏い外套を着た男はつまらなさそうに呟く。
アキヤマが撃った二撃目は心臓を貫く寸前に左手を犠牲にして無理やり軌道を変えたおかげで左手の握力はなくなった。
初撃で狙ったカウンターは確実だと思えた。でも、簡単に避けられた。あれは紛れもなく瞬脚だった。
自分の事ばかりで失念していた。そう目の前にいる敵も瞬脚を使えるということを。でも、何故そのことを綾子は俺に言わなかったのか、そもそも瞬脚をできることを知っていたのだから元々作戦が失敗していることは解っていたのではないか。
「この策は惜しかった」
――惜しい？
「君が考えた策ではないな……アレか。奴は私が弓道をやっていた事を知っていた。だから思いついたのだろうなこの策を」
「？」
「残心というのは聞いたことがないかね」
残心――それは結果を受け入れる心構えであり弓道において完成された無我の境地。
「そう、だがね、それは弓道つまり己を磨く為の武道にすぎない。私がやっているのは弓術、殺すための技術――」
ただ殺すために。予備動作、射儀八節はなく矢が射殺すように駆け抜ける。けど、それは弾ける。だが――次弾には間に合わない。
「あっ！」

初撃と同時に瞬脚で移動し放たれる矢から対応仕切れず身体にはいたるところに擦り傷のようなものが出来ている。が、狙っているのかそれは決して致命傷には成りえない。その傷が死に至らないのは事実。されど、連続して傷が増えれば、痛みが増していく。これでは身体より先に心が折れてしまう。

「ハァ、ハァ」

「なんだもう終わりなのか？　威勢がよかった割には幕を引くのは早かったな」

アキヤマの言うとおり俺の身体は立っているのが精一杯だ。でも、負けたくない俺は紅葉を護るんだから。

力なく足は前へと進む。

「しかし、わからないな。何故そうなってまで戦う？　紅葉の所為で身体を失って、生き返ってまた殺される」

目前にアキヤマの顔が現れたのに身体は動いてくれない

何故？　あの笑顔を護りたいと、あいつの泣き顔を――

『ふん、やはり忘れているか』

ふと、戦う前に零式にが言っていた言葉。忘れている？　何を？

「最早、答えられないか」

俺は初めて紅葉に会ったとき何を思った？

アキヤマの姿が遠ざかる。

あいつが泣いている姿を見ていたくないと、

弓を構えるのが見える。

泣いて欲しくないと、

矢が青白く光りだす。

笑っていて欲しいと思ったから、
解き放たれるは疾風。
でも、何故護りたいと思ったのか、
ブシュリと身体は裂けた。
今まで紅葉の笑顔を見てきて七瀬伊織はどう思ってきたのか、
次は必ず殺すと言うように矢が装填される。
弓道場で気づいた気持ちはなんだったのか――。
確実に射殺せる矢が戒めから解かれた。

「――！」
驚きはどちらのものか、殺せるはずと思っていたアキヤマのものか、身体がまだ動けると解った俺のものか。
ああ、馬鹿みたいだ。何でそんなことを悩んでいたのか。
俺は、七瀬伊織は秋山紅葉に惚れていたんだ。あの公園で見たときから。
右手を握り身体がまだ動くことを確認する。
動くなら止まるな、と言いたいところだけど瞬脚の使い方は向こうの方が上。と言っても近距離には持っていけないし。こっちにも弓があれば……はて？　どこかでそんなフレーズを聞いたような。
……あった。たった一つだけ遠距離用の武器が、おっちゃんの言うことが事実なら、零式！
（なんだ。奴から気をそらしている場合……）
いいから、少し聞け作戦タイムだ。

思いついたことを零式に手早く簡単に説明した。
（……不可能ではない、と言ってもそれしかないか。しかし、片手では支えられまい）
零式の言うことは事実。今の左手に握力を期待は出来ない。けど、やれるさ、後はお前次第だ。できるか？
（ふん、小僧が生意気なことを。いいだろうやってみるがいい）
「なにをしようとしているんだ？」
アキヤマの声に疑惑が混じる。が、弓の構えを崩すことは無い。
零式を右手に持ち左腕に添える。刃先をアキヤマに合わせ、瞬脚と同じ要領で霊力を溜める。
今度こそとアキヤマの弓に矢が宿る。
向こうが弓を持つならこちらも弓を持って戦えばいい。
シュンと矢が突風と化して辺りの大気を散らしながら駆ける。
「いっけぇぇぇぇ！」
溜めた全霊力を解放する。足ではなく零式に――
「な、に？」
アキヤマがここで初めて動揺を見せる。
当然だろう、誰が思いつくのか刀が伸びるなど。これが霊力に呼応し刀身が伸びる零式が弓と言われた所以――しかし、たったこれだけの意表を突いただけではアキヤマは揺るがない。
狙いを定めた位置に最早アキヤマの姿など無い。されど、
初弾を囮にして次弾で仕留めるのがこの男の戦法。これは十分な距離を持って成立する戦術。だが、もしその距離をゼロに出来たらその戦法は崩れてしまうのではないか。
「――が！」
身体を襲う衝撃に顔を歪めるもほぼ無傷。が、彼の唯一の武器である霊弓は代わりに斬られてしまった。
「はぁ、はぁ」
（あの程度も決められぬとは）
まぁ、文句は言うなよ。これで同じ土俵だ。しかし、もう霊力な

んざ少ししか残ってねぇ。
「そ、うか」
アキヤマの戦い方には決定的な弱点が存在する。さりとて、それは本来なら弱点などには成り得ないもの。が、それを実現させたイレギュラー。霊力に倣い伸縮自在とする霊刀零式。
アキヤマの弱点、矢を撃つ時標的を中心として一定の距離を保ち続けること。その当たり前の行為が致命的なものとなった。
そう、元々アキヤマが移動させるのが目的だった。常に狙い撃つ距離が同じなら伸びた刀身の零式を振り回せば必ず斬れると踏んだのだ。結果は霊弓破壊にしかならなかったけど。
「これで条件は同じだ。いや、零式を持っている以上こっちの勝ちだ。あんたを倒す前に何故、紅葉を憎んでいるか聞きたい」
アキヤマへ歩を進める。
「くっ……」
「何だ？」
「あーはっはっはっはっはっはっは！」
狂ったように笑いだす。その顔には狂気とも言えるものが浮かんでいる。
「くっくっく、笑わせるなよ小僧」
「なっ！」
アキヤマの姿が消えると同時に身体が跳ねると零式が手からすべり落ちた。
「かっ、は」
肺から酸素が全てが追い出されていく。
まずい。
「なんだ。やはり、この程度か小僧。いい気になるなよこの程度のことなど既に体験している」
「がっ」
繰り出される拳に加減など存在する訳がなく、容赦なく身体に打ち付けられていく。

「何故、紅葉を恨んでいるか？　いいだろう、教えてやる」
口を動かしているアキヤマの攻撃は止まることがない。
「あっ、ぎっ」
「あれはな、忘れたんだよ」
忘れた？　紅葉が何を。
「あいつは君に会って命を懸けてまで護りつづけた私を忘れたんだよ」
蹴りが脇腹を捕らえる。胃から汚物が逆流するのを無理やり抑える。
「な……んで？」
「ふむ、まだ喋れるのか」
アキヤマは感心したように頷くと今度は顔を殴った。
「紅葉が泣いているときは常に私を思ってだった。
私は死んだ直後に紅葉の危険を知った。狙われそうになれば護り続けた。たとえ血反吐を吐いてでもな。私を常に思っていた紅葉がいればそれだけで救われた。
なのに、貴様が来てから紅葉は私を思って泣くことなどなく貴様に笑いかけてばかりだ。泣いている時は紅葉は私のものだったのに。私を忘れた紅葉に、命を懸けてまで護った私を忘れた紅葉に生きる価値など無いだろう？」
その言葉に何かがキレた。
「……んな」
「なんだね？」
「ふざけんな」
こいつが本当にそんな理由で紅葉が憎んでいるのは聞いていればわかる。でも……だから、だからこそ許せない。
「紅葉があんたを忘れてる？　そんなの誰が決めた」
殴られ続けてガチガチになった身体を無理矢理動かして。
「あいつが、紅葉が何で弓道をやっているのか知っているのかよ」
固く握った拳で顔面を突き刺した。

「あんたを忘れない為にあんたがやっていた弓道を習っているんだ」
「なに？」
動きに躊躇いが出てきても攻撃の手は緩まない、それを体力も霊力も尽きかけている身体で応戦する。
「あいつはあんたの死を背負って、歩いて、生きているんだ」
一撃を振るうごとに身体が削れていく。
「ずっと見ていたんなら、何で、なんでわからねぇんだよ」
身体の色素が徐々に薄れて消えていく。でも、そんなことは知らない。この身体はただそれだけのためにあるんだから。
「――」
「なんで、てめぇが不幸みたいなことを言ってるんだよ。紅葉を命懸けてまで護ったのは紅葉に思われていたいからか？　違うだろ、紅葉に生きていて欲しいと願ったから、笑っていて欲しいと思ったから――」
あんたは護ったんだろ、ともうぼろぼろ拳でぶん殴った。

欠片

「なんで、てめぇが不幸みたいなことを言ってるんだよ。紅葉を命懸けてまで護ったのは紅葉に思われていたいからか？　違うだろ、紅葉に生きていて欲しいと願ったから、笑っていて欲しいと思ったから――」

その言葉で全てが止まった。忘れていたものがそこにあった。

避けられるはずの、もう相手も動くのが精一杯の中で出した一撃をうけて倒れた。

「あー」

拳を下した少女はゆるりと先の刀をを拾い上げる。ただ、とどめを刺すために黒い柄を握りしめ振りかぶる。

欠片は埋まったのだ。ならもうそれを受け入れようと目を閉じた。ただひとつ遺り残したことがあるとすれば目の前の少女に謝ることだけ。

「？」

終わりを受け止めようと目を閉じたのに終わりは来なかった。代わりに何か温かいものがあった。

「も……みじ？」

「お父さん、ごめんなさい。私のせいで、私が殺しちゃって」

紅葉の声は震えてはいるが私の顔をしっかりと見ている。

恐くはないのかと聞く前に紅葉の声が先に出る。

「私はお父さんを忘れていたわけじゃないです。ただ泣いてお父さんを思っているより、私は元気だよって、お父さんの分まで生きるよって笑顔で伝えたかった……」

私は馬鹿だな、こんなにも小さくて温かいもの、そして何よりも護りたかったものを信じていられなかった。

「お、父さん？」

身体は簡単に動いた。このまま紅葉を抱くのも容易いだろう、だ

が私にそんな資格なぞありはしない。このまま紅葉を突き放した。
「七瀬伊織君、早めにとどめをさして貰えるとありがたい。このままじゃ、更に罪を重ねるかもしれない」
「わかったよ」
「り……つ？」
そう言った少女の身体は消えかけていた。しかし、少女はそんなことで止まらない。私を止める刀身が朝日に反射して輝いていた。
なんて、キレイなのだろうか――
トスリと身体に突き刺さった。
「申し訳なかったね」
「まぁ、いいさ」
そう少女は笑った。

夜明け

黒い外套と共に灰になり風に流されていく。
それを見て少女は泣くのを必死に堪えている。この少女は泣かないのだろう、彼女のさっきの言葉は誓いなのだ。決して泣かないと。でも、そんな誓いなんぞこの少女には必要ない。
バキリと身体がひび割れていくように音がなる。
この身体もここにいるのも限界か。ま、結構無茶した割りにはもってくれた。
ありがとうな、八ノ瀬　律。
しかし、紅葉がいきなり出てきた時には驚いた。綾子も茨先生も何考えてたんだか。
あ、そういや。まだお礼言ってない。ま、いっか多分この後会えるだろう。
「り、いえ伊織、ありがとうございました」
「え？」
意外だった。紅葉は怯えることなく、こっちをしっかりと見ている。
「そして、ごめんなさい」
「はい？」
状況が掴めない、何故目の前の少女が頭を下げているのか。
「私のせいで伊織が事故に遭ってしまいました」
あ？　あ～、そうか。
「てい」
「いたっ」
軽くペシリと頭を叩いた。
「何言ってんだ。相変わらず真面目だな紅葉は」
「え？」
「あのな俺もお前の父親も紅葉に生きて欲しいって思ったから護っ

たんだよ。誰も紅葉を責めやしねぇよ」
そうアキヤマは少し間違えたっていうだけの話。
「だから、泣きたいときは泣いちまえ、最後に笑ってれば俺もあいつも紅葉を護ったって胸を張れるんだから」
ふぇと顔をくしゃくしゃにして涙を見せる。
「さて、俺の役目はそろそろ終わりみたいだ」
足がもう消えているようにしか見えない。というか足から消えるって本当なんだなぁ。
「伊織、私は貴方が好きです」
そう泣きながら、でもしっかりとした声で言った。
「――ハァ」
正直、少女の気持ちは嬉しいでも、
「紅葉、俺は死者だ。それに応えられる資格はない」
そう、これに応えてもただ紅葉を苦しめるだけ。
「伊織……」
「大丈夫だよ、紅葉。だから、お前もがんばれ」
朝日を浴びる公園には少女が一人立っていた。

終わり

「ん～、今日もいい天気で助かります」
冬はお日様がないと辛いですね。
うちの前には見覚えのある家が最近、建造されたのですが。１８年前に建っていた家と似ています。
１８年前にうちの前に建っていた家はなくなっていたのですが、誰もそのことに気づいていなかったので綾子に聞いてみると秘密と言われてしまいました。
「まぁ、気のせいでしょう」
早く行かないと会社に遅れてしまうのでさっさと行きますか。
「あれは？」
駅までの道に誰かが立っていた。本来、紅葉なら特に気にするはずがない通行人なのに、

――春は始まりの季節――

どうしようもなく気になった。

――冬は準備の季節――

前に進もうとしていた足が止まっていた。

――だから、春までに準備をしよう

――

「よ、久しぶり」
彼女の目の前にいたのは、
「い、おり？」

それは紛れもない幼馴染みの七瀬伊織だった。
「ゆ、幽霊、じゃ」
伊織は訝しげに眉をひそめる。
「足はついてるぞ」
「ど、どうしてここにいるんですか？」
「んー、なんでも給料らしいぞ。輪廻転生とかいうやつ？　解りやすく言うと生まれ変わった。まぁ、だから１８年もかかった訳だが」
「なんで、だったらすぐに会いに来てくれなかったんですか」
んー、と恥かしそうに頬をぽりぽりと掻く。
「まぁ、この国の法律を考えたら、１８年経たないと無理なんだよ」
「どういうことなんですか？」
あーっと上げた声にびくりと身体を紅葉が震わす。
「？」
紅葉の前に手が出される。
「七瀬伊織は秋山紅葉が好きです。だから……結婚してください」
「……」
「答えは？」
「わ、私はおばさんになっちゃったんですよ？　本当にいいんですか？」
「いいの、じゃなきゃここに来ないって」
ギュッと伊織の手を握り返す。
「オーケーってことかな？」
「……はい」
「んじゃま、まずは花見の準備でもしようか？」
「はい」
――幸せになる準備を――

〜
f
i
n
〜

おまけ

？？：ここまでのご愛読ありがとうございましたー！
？？：ありがとにゃー。
？？：はっ！　ギン君まずいですよー。
ギン：なんだにゃ？　静流。
静流：読者の皆さま私たちのこと知らないんじゃないかなー？
ギン：そういえば、そうにゃ。このままでは作者が突然、萌え路線に向かっていると思われるんじゃにゃいかにゃ？
静流：それはまずいー、因みにさっきから喋っているのは猫耳キャラとかじゃなくて本物の猫ですよー。
ギン：そうなのにゃ。語尾ににゃとか付いているけど、これはデフォルトにゃ。
静流：では、私たちの自己紹介を。
ギン：にゃー。
静流：まず、私は霊界案内人の静流ですー。ん？　と思われた賢き読者の皆さま方その通りです。本
　編に登場した白河　莢先生と同じ仕事しているんですが。本当なら私のポジションだったんで
　すよー。なのにそしたら作者が。
作者（プライバシーの保護の為名前を出せません）：えー、紅葉と喋り方が被るから。
静流：の一蹴ですよー、信じられますかー。
ギン：まだ静流のはいいにゃ、僕なんて本当なら真中綾子のポジションだったのに。
作者（プラ以下省略）：え？　いや、なんとなく綾子を出したかったから。
ギン：ふざけるなってのにゃ、このままストライキでも起こすかにゃー。

静流：それはいいかもですー。
作者（プ以下省略）：えー、そんなことをすると次回の出番なくすよ？
静流&ギン：えっ！　ごめんなさい。ていうか出番があるんですか？
作者（以下省略）：うむ、中々に早い切り返しだ。んー、それは読者さま次第かな？
静流：それはどういうことですかー？
作者（下省略）：ここに今宣言します。多分、小説家になろうさまでは初になること間違いなし。
第一回　霊ず・でっど人気キャラクター投票を開始します。
メッセージに好きなキャラの名前とコメントを書いてw0264Aまで送ってください。
で、その司会を君たちにやってもらおうかなぁと思って。
静流：ほ、本当ですか？
作者（何かもう面倒くさくなってきたのでいいや）：うん、けど最低でも10票くらい集まらないと、
この企画できないから、頑張って集めてね。
静流：えっ！　私たちがですか。
作者：そう、頑張って自分たちの出番を勝ち取るんだ。じゃあ、いってらっしゃい。
静流：わかりました。行くよギン君。私たちの出番を勝ち取るのですー。
ギン：にゃ～
一人と一匹がこのステージを出るのを確認して。

作者：さて、うるさいのも消えたし。
ここまで読んでくださった皆さまありがとうございました。
上に書いてあった企画はやりたいので皆さまどうかご協力のほうをお願いします。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2013a/

霊ず・でっど

2010年10月8日15時02分発行